

のより見れば、僅々八九里の周圍ある城廓中に籠りて十萬盡くるべきの軍勢を待ち、以て戦を決せんとするは萬得策にあらざるあり。さてガリバルデーは其動かすべからざるを見、更に建議して曰く、羅馬僧は邦家の敵あり、佛境の軍來らば必ず之に應じて以て我が政府に迫るべきあり、よろしく斷乎たる手段を取つて豫め之を處せざるべからずと。又不幸にしてマシユ等の等閑視する所とあれり、彼等謂へらく是れ過激の言あり、一般法律の外に特に僧侶を處するの法を定むるは却て彼等をして憤怒を加へしむるに過ぎず、伊國共和政府は法王の政權を殺さしも決して法權を害せざるべしと。蓋し其見る所の當否は伊國の上に向つて將に數日の内に決すべきあり。

## 其十一

佛將オーデノー數萬の兵を率ひて伊國に入る、一人の抗抵するものあり

氏謂らく果して然り奴輩與し易きのみ、直に進んで羅馬府に至り一舉して之を扱くべしと。則ち兵を進めて羅馬に到る、さてガリバルデーはピラマシーチの宮殿を以て本據としサンパンシラシオ、ポーチーリスの二門を以て兩翼とあし、兵を伏せて敵の到るを待てり。此日天氣晴快あり、旭日將に東山を出でんとするとき、旗下の兵佛軍の一斥候を獲て歸る、斥候ガリバルデーの足下に伏し命を乞ふ、氏笑つて之を許し左右を顧みて曰く——フランス我が足下にあり——と將士相傳へ呼んで曰く——フランス我が足下にあり、フランス我が足下に在り——と佛軍漸やく前門に集る、衆皆腕を撫して待つ、忽ち後門小高き所に一隊の兵あり、我が軍を亂撃す、僧兵の佛軍に應ぜしものあり。ガリバルデーは大に怒り一隊を分つて之に當らしむ、僧兵敵する能はず、打ち出す砲烟の中に雲散するに至れり。

佛將オーデノーはガリバルデー其の人を知らず、謂へらく南米漂泊の一

鼠賊のみと直に兵を進めて彼の二門より侵入せんとす、ガリバルデーの軍措て問はず、其半ば入るに際し兩翼等しく立つて撃つ、撃たれて而して斃るゝもの多し、是に於てオーデノー始めて其戦備あるを知り、隊を整へて小高き岡に據り銃を取つて我が軍に臨む、我が軍之に應じ數時の間奮戦したり、馳て敵の一隊一門を突て進み横ざまにガリバルデー等を打つ我が地位路狭ふして進退に使あらず、不意を襲はれ且つ左右に敵を受けしかば殆ど爲す所を知らず、只一齊に隊を整へて立てり、此の時敵兵疾風の勢を以て攻め寄せ、林木を倒すが如くに我が隊を倒し馬に鞭ち刃を手にして蹂躪し、馬足ガリバルデーの躰に及ぶと數々、劍鋒氏の頭に觸るゝに至り實に危ふく見へたりしが、恰も伊國大學の學生一隊雲を突き風を切つて突賊佛兵に迫り縦横無盡に打ち立てければ、佛兵遂に敵する能はず、其軍大に破れ隊を亂して城外に走れり、我兵追撃數里に及び無數の囚

虜を獲て全勝を占めたり。

佛軍再び大敗を取りて三度戦ふの勇氣あし、大將オーデノー一策を案出し先づ伊國政府に請ふに休戦の上平和の談判を以て之れが極を結ばんとを以てす、ガリバルデー曰く敵の心圖るべからず、或は談判を名として休戦を爲し、本國より援軍の來るを待つて再び戦はんとするの計策あるやも知るべからず、よろしく彼等を窮追して國外に放ち然る後、和すべくん則和すべきありと、マシニ等聽かず、是れ蠻人の戦法のみ共和政府の爲すべき所にあらずと、佛將の請求を容れ數月間の休戦を諾せり。時にニアポリタンの軍勢、西の兵と共に國內に侵入せりとの報羅馬に達しければガリバルデーは旗下の兵を率ひて之に赴き、激戦の後數々彼の軍を破ぶり將に之れを退けんとするに際し、マシニ等は書を傳へて急にガリバルデーを羅馬に呼び還せり、佛將はガリバルデーの見る所に違

はず休戦間に於て故らに談判を遅引し、本國より援軍の來るを待ち、已に十分の戦備を整へければ、忽ち談判の不調を告げ、茲に開戦を促すに至りしあり。ガリバルヂーの羅馬に至るや、マシニは頗る心に顧て耻づる所あり。氏の歡心を買はんが爲に書を送つて其の欲する所を求めしむ。氏復書して曰く余は唯一の主權者たらんとを望む、然らざれば則ち一軍人にして足れりと。マシニ喜ばずして止む。

抑佛、壤諸國は伊國共和黨を目して無賴の徒私利を營むとあし、之に向つて攻撃を加へたり。然るに佛將オーデノーの所爲は却て反對に出で權謀詐僞以て伊國に對せり。オーデノーは實に休戦の間に戦備を爲せしのみならず、六月四日を以て開戦すべきとを約しむがら卑劣にも同月二日を以て夜、羅馬府を襲へり。ガリバルヂー等は不意の砲聲に夢を破り、戈を取つて準備を爲せしに外廓の衛士は已に佛軍の虐殺する所とあり、敵は進

んでソオートルメンテの要所を奪へり。取り敢へずガリバルヂーは兵を分つて各所に陣せしめ、以て敵兵を撃ち退げんとしたれども、數万の敵は根據を堅めて動かさず、我が兵愈よ退守の勢とあり、必死に防禦して翌朝に至りしが、此日は早や羅馬の運命を決するの時とはありぬ。兩軍交戦、佛軍兵勢を加へて其數知るべからず、我が兵次第に減少して十一に對するに過ぎざりしが、彼の邦亡びて憂ふるを知らざるの僧徒は機失ふべからずとあし、十字架を振て佛軍に應ぜしかば、我が軍又如何ともすべきの術なく、戰時の中に愛國至誠の精神は空しく血痕を止むめて大空に向ひ、神聖自由の大都は再び狐鼠の窟窟とあるに至れり。嗚呼マシニ汝は何故に知らざるの軍機に干渉してガリバルヂーの言を用ぬず、以て此千歳の大事を誤るに至りしか。咄、果して今何の辭かある。

## 其十一

マシニがガリバルデーの計策を用ゐざるの責は到底免るべからずと雖  
 ども、又一方より看察を下せば天下の大事は自ら命運の然らしむる所あ  
 り、強ち以てマシニの罪ありと断定すべからず。マシニも亦一個の快男兒  
 あり、羅馬府一度佛軍の爲に占領せらるゝや其の爲すべからざるを知り  
 身を挺して一海港に至り、船長某に向つて曰く余はマシニあり、足下能く  
 余をして此船に乗るを得せしむるや否やと、船長之を諾す、時に更敵軍よ  
 り來り氏を搜索すると頻りあり、氏自ら役夫の服を着け食器を洗ふ一吏  
 見て其氏あるを知り少しく躊躇したりしが遂に知らざる爲して去る。氏  
 は幸に虎口を免れて佛國マルセイユに至り、是れより又スウヰツツラ  
 ンドに赴き、サントヒに會して以て更に伊國の回復を圖れり。ガリバルデー  
 の將に羅馬を去らんとするや米公使キヤヌ自ら氏を訪ひ、告げて曰く  
 已に茲に至る、足下もし嫌ふらくんば願くは一船を繼して我が國に向へ

余必らず力を盡して足下の安全を圖るべしと、ガリバルデーは其厚意に  
 感ぜり、然れども彼に告げて曰く余は羅馬の落城を以て未だ事終ると爲  
 さず、旗下尙多少の兵あり將に機を計つて一快戦すべしと、相辭して去る。  
 其後ガリバルデーの志は不幸にも水泡に歸せり。佛、奧、西の軍勢は已に伊  
 國全洲に侵入して勢恰も洪水の堤防を決せしが如く滔々として止むべ  
 からず、旗下の兵は次第に散じて殘るもの至て少く、加ふるに茲にガリバ  
 ルデーが全力を奪ふに足るべき一事に際會せり。

アニタは常にガリバルデーに追隨して、彼の羅馬落城の際に於ても氏の  
 側を離れざりしが、事漸く危険に迫りければ氏は、アニタに告げて曰く汝  
 が其懷妊の身を以て軍中にあるは甚だよろしからず、請ふ去つて暫時知  
 人の家に行けど。アニタ之れを聽かず——畢生間に始めてガリバルデーの  
 言を聽かずして曰く妾は女子ありと雖どもガリバルデーの妻あり、此危

急のときに於て相分るゝは死すとも能はず、願くは軍に従て力を致さんと。ガリバルデー叱して之を止めんとせしもの再三、遂に聴かず。アニタは自ら頭髮を斬り、男裝を爲して一馬に跨り以て彈丸雨飛の中に奔走せり。諸全國の僧徒は外軍と力を併せてガリバルデーを逮捕せんとし、到る所に攻撃を加へしかば、ガリバルデーの兵多くは之が爲に屠殺せられ、或は生擒せられて無殘の最後を遂ぐるに至れり。斯かる中に、懷妊の身を以て風に櫛り雨に沐したるのアニタは、忽ち病の襲ふ所とあり、歩行さへも得ず。あらねば、ガリバルデーの困難云ふべからず、漸くにして一海岸に達し、夜間數艘の船を繼して私かにピニスに向はんとす。折しもアニタの病激し、嗚呼氏は已に敵の爲に己れの國を奪れて其身は彼等の物色する所とあり、小船に乗じて滄海に漂ひ、一掬の水一粒の食得てアニタに與ふると能はず。アニタは茲に病の峠に達して、恰も生死の別れ路、息も片息止の音は

かり——時正に仲秋あり、満月空に懸りて秋氣清く、白光斜めに映じて、特にアニタの顔を照らすの様は美あり、眞に美あり、然れども此美や丈夫の心腸をして殆ど寸断せしめたり。

埃國の船は海上に充滿せり。氏等が注意に注意を加へしにも拘はらず、遂に彼等の發見する所とあり、追撃頗る激し、然し我が船は少にして彼の船は殆ど海を蓋ひしかば、砲聲の響くと共に紛擾を來して、彼我を分たず、幸に氏等は此間を脱するを得て一海岸に到着したり。氏は自ら殆ど死せるが如きのアニタを腕にして上陸し、人を馳せて民家を求めしむ。暫くにして其人他の人と共に來る、見れば知人ボンチットあり。ボンチットは曾てガリバルデーの旗下にあり、羅馬落城の際傷を負ひ、此地に來て療養せるものありしが、偶然所用ありて出で來りしに、圖らず彼の人に會し、茲に至れるあり。ガリバルデーの爲には地獄に佛の思あり、則案内を請ふて一民

家に至り、醫師を招きてアニタを治せしむ。醫師來る氏は飛立ち迎へて曰く、願くは足下の力に依てアニタを死せしむると勿れと。醫師肯づき氏を扶けてアニタを床上に横へしむ。氏之を爲し、アニタの背を擁せしの手を脱してアニタの手を取り、之を診するに、已に脈搏を覺へず。アニタは逝れり、アニタは死せり。ガリバルデーは之を見て之を知らず、之を知つて之を感せず、已にして始めて之を知り、之を感じ、愁傷哀痛爲す所を知らず、唯仰て天を望み伏してアニタの顔を視、未だ曾て泣がざるの眼は涙流れて雨の如く、未だ曾て亂れざるの心は殆ど狂せり。ボンネットは此有様を視て共に袖を濡ほせしが、漸く心を勵し、ガリバルデーに告ぐるに事甚だ急あるを以てし、厚くアニタを葬り、氏を促して其路を急がしめしかば、氏も又身の地位を悟り、且つ一度は如何にもして母に會し、兒童の顔を見んものと、よろめく足を踏み止どめ、踏み止どめては踏み出し、ボンネットと共に

晝は匿れて夜に歩み、三十七日間の旅路を重ねて漸くスツルピノの海岸に達せり。

## 其十二

艱苦とは何の謂ぞや、世間果して斯くの如きものあり以て吾人を襲ふか否、艱苦あるものは外物にあらず、唯薄弱の心に存す。吾人一事に會するに當り、心之を以て艱苦とすれば、則ち艱苦あり、艱苦とせざれば、則ち艱苦にあらずるあり。故に達識の看を以てすれば、世間眞に艱苦あるものあるなし、とは云ふもの、世始より達識の人あり、數々艱苦に當つて然る後、其の艱苦にあらずるを知るあり。諸もガリバルデーは始めて志を立てしより、アニタの死に至るまで、殆ど人生の艱苦を嘗め盡せり。今賊僧外敵が力を併せ懸賞以て氏を求むるの中を通行して、チャルバリと名くる所に至り、知人の家に止どまりて休息すると數日、人々の氏を慕ふて訪ひ來るもの

多し。伊將マルモラ之を聞きガリバルデーの身をして他國人の手に落ちしめんよりは寧ろ我が手に入れて相當の處分を爲すべしと、吏に傳へてセノアに引渡し形之如くに入獄せしめ、其夜一船を醸して氏を乗せニースに向て發せり。氏のニースに達するや、マルモラに請ふて一日——二十四時間の猶豫を得、故家に走りて兒童に面せり。兒童の氏の顔を見るや喜ぶこと斜ならず、先づ問ふて曰く母は何處にあるかと、ガリバルデーは默然として答へざると少時、已にして曰く母は彼處にありと側にありし乳母を指し示せしに、兒等其意を解せず、再び問ふ所あらんとしければ氏は之を止めぬ——父は今急用ありて他國に行くべし、追付歸り來るべければ斯日を無事に成人しや——と言ひ棄て、徐々出で行く様を見る人泣かぬはあかりける。さて氏は船に歸りしに一吏あり告げて曰く我が政府は詮議の上足下を追放するとに決せり、但し格別の次第を以て其行く所

は足下の欲する所に任すべしとガリバルデー謂へらく地の遠きは再舉に不利あり、則ちチユニスに至らんことを求め、軍艦トリポリ號に乗じて同地に至たりしに、チユニス政府は元來フランスの指揮を受くるを以て氏の上陸を許さず、止を得ず轉じてデブラルタルに至る、英國派遣の縣令又氏の上陸を喜ばず、六日を期して此地を去らしむ。嗚呼歐洲諸國一義者の國あるを、此人をして伊國を追放せしめて又歐洲を追放せしむ何ぞ其れ無道あるや。

止を得ずガリバルデーはアフリカに赴き知人の家に止まると數月、今や其身も無事に苦しまに至りければ、航海或は商業に従事して獨立の生計を營み、兒童等の生育を助けんと思ひ之を知人に圖りしに、知人曰く君もし之を爲さんと欲せば北米合衆國よりよきはあしと、依て氏は多少の資金を調へ便船に乗じてニューヨークに赴き一事を爲さんとせしに同

地は金融活潑商業繁盛の都會あれば中々少許の資本を以て着手し得べきの業あり。又商船の船長たらんと欲したれども、合衆國の規則として同國政府の免許狀を有するにあらざれば船長たるを得ずとの事に果さず、他に爲すべきの道ありしを以て友人の勸により蠟燭製造所の手代とあり。英雄時を得ざれば常人にだも如かず——手代のカリバルザーは愚人あり役に立たず——との評を得たりしが主人は豫て少くカリバルザーを知りしもの故敢て其業を責むることなく、最と鄭重に取り扱ひ時々は共に山野に獵し河海に漁する等暗に氏が失意の心を慰むる程ありしかば、カリバルザーの爲には一も不足とはあらざりし、然れども人は己れの欲する事を爲す能はずして己れの欲せざる業を取ると程心に不愉快あるはあり、カリバルザーは如何にも蠟燭屋の手代に適せず、或る日謂へらく余は元來水夫あり水夫たるの事を好んで水夫たるの業に練

熟せり、よろしく水夫となりて機を得るまでの歲月を送くるべしと、則獨り家を出で、海濱に至りしに、恰も數艘の船あり、無數の水夫荷を負ふて上がり来る。カリバルザーは之れを見て進んで船内に入り水夫等に問ふて曰く——何ぞ爲る事はありか——水夫等答へず問ふと再三一人叱するが如くに答へて——手は十分だ貴様を雇はずとも餘る位だ——その言にカリバルザーは茫然として又——別に賃銀を取るといふ譯ではあゝい寒いから助けやうかと思ふのよ——と言へど水夫は取合はず——此馬鹿は側へ依れ邪魔にある——との語さへ急がはしげに働きけり、實に敗軍の將、細口の道を求むるは士族の商法よりも拙あるものあり、眞に笑ふべきも亦悲むべき哉。

カリバルザーは止を得ず再び蠟燭製造所に歸り、職業を勉勵し、暫ばしの月日を送りしが、どう思ひ定めても此月日は氏の爲めに安からず、却て往



時南米にありて百難千苦の中に奔走せし歲月を暮ひ居れり。雖て本國より二三の知友來るに會しければ、共に相談の上中央アメリカニ渡りて航海の業に従事せんとし、其趣を主人に告げて製造所の手代を辭し、再び知らざるの郷に向つて冒險の業を試むるに至れり。讀者諸君、諸君は何が爲に天はガリバルデーをして此境遇に立たしめしを知るか、幸に一考せよ、

## 其十三

賢人必らずしも賢ならず時としては愚あり、愚人必らずしも愚ならず時としては賢あり、唯愚人は其賢を以て驕り、賢人は其愚を以て戒む。ガリバルデーは一世の英傑あり、然れども其の欲する所を肆にして直に邦家の上にて實行せんと欲せば到底其志を達するの時あかるべし。故に天今氏をして此境遇に立たしめ、自ら顧みて警戒を加へ、以て將來に供へしむ。さて氏は航海の業に従事せんと欲し中央アメリカに來りしが好都合を得ざり

し故に去りてリマに向ひ、用意を整へて東洋諸國に航海せんと決したり。然るに氏が其愚を重ねしとも云ふべきとは、氏が知人の家に在るとき一の佛人あり、數々訪ひ來たり。ガリバルデーは性質至て世辭に慣れず、且つ其佛人が多言あるを見て常に之を避け居たりしが、或る時偶然一室に會し佛人先づ氏に向つて語を掛け、れば氏も辭すると能はず、二三の語を交へしに佛人は例の自國自慢の氣象を以て盛にナポレオンを稱賛し、ナポレオンが伊國に攻め入りし時のことを説きて、伊國人の意氣地あきを嘲笑したり。ガリバルデーは心中大に怒り、之を詰責せんとしたれども、其家の人々に對し忍び居りしに彼の佛人は尙も語を續ぎて斯かる身屈の人種は到底獨立を期すべからずと言ひ放ちければ、ガリバルデーは覺へず聲を擧て其無禮を咎めしに佛人も氏の見幕にや恐れけん其座を辭して去りけり。已にして數日氏は頻りに航海の準備を爲し居る折、友人あ

り一新聞を持ち、來り示す、中に一項あり彼の佛人の投書に係り、ガリバル  
 デーを譏謗して彼は嘗てウルガイに於て海賊を爲したり云々とありけ  
 れば氏は之を見て棄て置き難しと爲し、佛人の家に行きしに彼れ恰も店  
 頭に立ち居たり。ガリバルデーは彼に向ひ、汝は我を知るや否やと云ひし  
 に佛人知らざる爲して、知らずと答へければ、氏は憤りに堪へず直にステ  
 ッキを以て彼れを打てり。此時一人あり、飛び來つて棍棒を振り後面より  
 氏の頭を打ち、血は流れて氏の面を蓋へり。佛人は尙是を以て足れりとせ  
 ず短刀を抜て氏を刺さんとせしかは、實に危険に見えたり。此時氏は殆ど  
 倒れんとしてよろめきしが、短刀を見るより足を踏みしめ、猛虎の如き勢  
 を以て佛人の手を打ちしに、佛人は短刀を地に落し驚き周章て、室内に  
 逃げ入りたり。忽ち數人の巡查あり來つて氏を捕へんとす。又數人の知人  
 あり氏を擁して去る。巡查も如何ともする能はず其儘に止みたり。氏は後

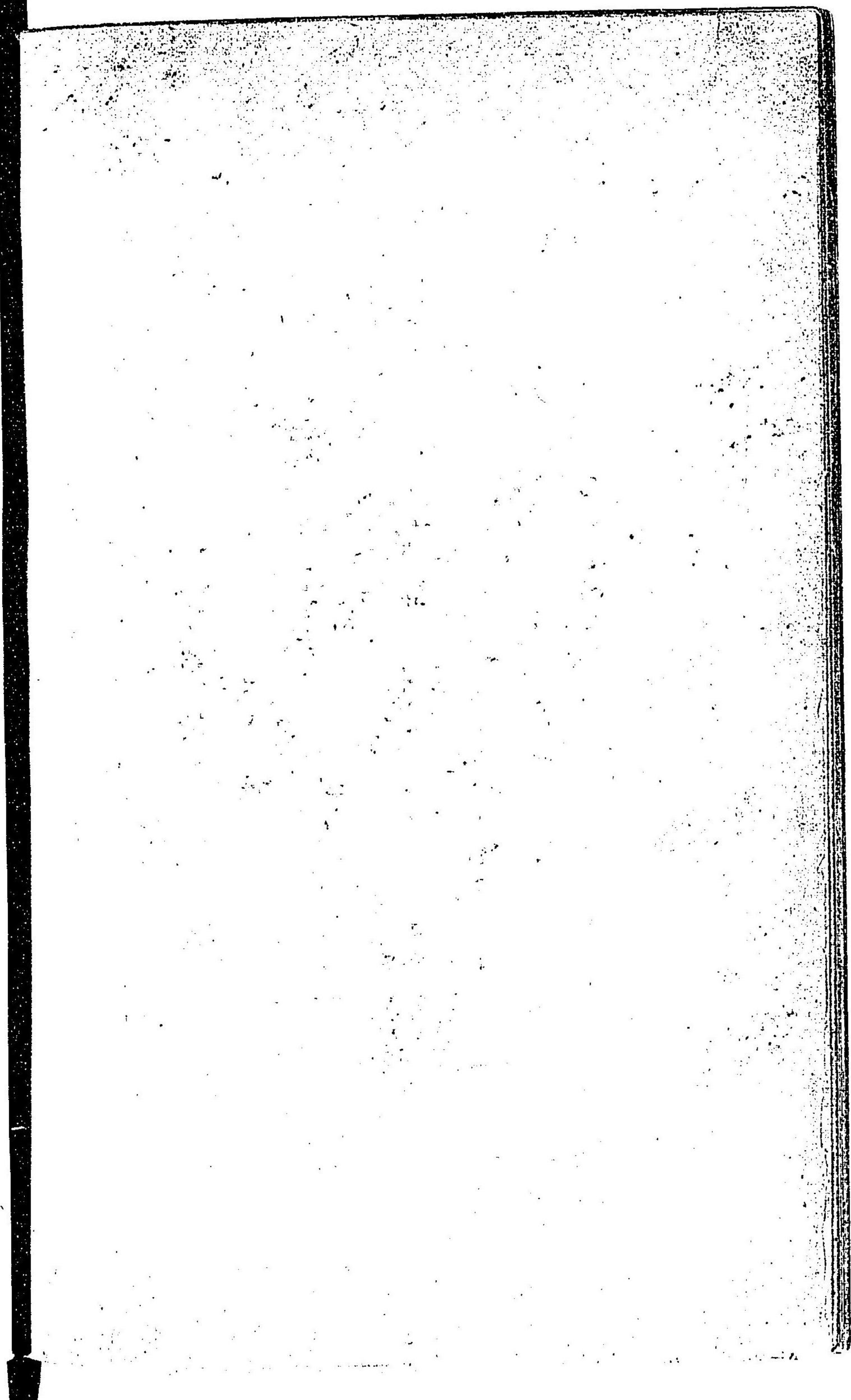
日之を思ふて深く心に悔ひ、且つ參軍の勇奪ふべきも匹夫の志奪ふべか  
 らざるを知り、邦家の改革を爲すには人心の向ふ處に従つて導くの外他  
 に爲すべきの道なきを悟れり。

是れよりガリバルデーは商船に乗じて支那近海に來り、カントン、アモイ  
 等の間を往來して通商貿易に従事せしが、再び本國を出で、五年の後に  
 至り恰もか彼の伊國先帝ピクター、エンマニエルがサルツニアより起つ  
 て埃國と戦ひ、伊國を統一せんとするに會せしかば、氏は大に喜び、直に船  
 を廻らしてニーズに至り愛兒等と共に數日の閑を樂みたり。舊友の集り  
 來るもの日に多く少壯義侠の徒又皆氏の旗下に立て邦家の爲に盡さん  
 とを請ひければ、氏は進んで戰場に赴き、内亂を平定し外敵を退けしより  
 ニーズ、ゼノア等を始めとし伊國一半の人民は氏を押しして盟主とあし、氏  
 を戴いて主宰者とあさんとを請へり。蓋し此時は伊國獨立の命運決する

の時あり。もしガリバルデーをして時勢を察するの識見なく徒らに匹夫の勇を頼んで伊國の一半を率ぬ、ピクター、エンマニエルと争端を開かじれば、蚌蟪の争漁父の利とあり、伊國は遂に其生氣を絶つに至りしや必せり。ガリバルデーは元來共和の政脉を好み、國民の自由を全ふせんと欲せば、此法に據らざるべからざるを信ぜり。故に昔日の心を以て今日に實行せしめば必ずやピクター、エンマニエルと方向を争ふべきの理あり。然れども氏の經驗は氏が時勢を視るの眼力を助けて萬全の策を取らしめたり。氏は伊國一年を服従せしめたるの軍勢を率ひてピクター、エンマニエルに會し、佩刀を解て帝に獻じ、伊國を一統の下に歸せしめしかば、是れより伊國は數々佛、埃諸國と戦て之を破り、終に歐洲諸國をして伊國を認めて獨立國とあすに至らしめたり。夫れガリバルデーが從來伊國の爲めに盡せしの功勞は實に大あり、然れども、し氏をして時勢の爲め國の爲

に己れの利と己れの説を棄つるあからしめれば、氏は亂世の姦雄にして終らんのみ、只其れ此一舉あり能く其身を全ふし且つ伊國を全ふするを得たり。

此後ガリバルデーは暫らく身を閑散の地に置きたれど、事伊國の利害に關するものあるときは立つて力を致すと舊時に異ならず。氏は一生を邦家の爲めに送り、一千八百八十二年則ち七十五年間義と勇とを以て織り成したる錦を着て遂に白雲の郷に向へり。ピクター、ヒューゴ曰く佛軍は羅馬を蹂躪せり、然れどもガリバルデーは歐洲に勝てりと。蓋し氏が百難千苦に當つて毫も屈撓せず、遂に能く己に倒れし伊國を捧げて、羅馬の尊榮を回復せし功は實に千古に渡つて滅せざるべきあり。



# 活劇史第三卷

矢部五洲譯述

## 無冠の女王マナン、ローランドの傳

其一

雨を下すに悪人の田と善者の畑とを撰ばざるの天は則ち世界萬物を包含するの天あり。勸善懲惡の點より論ずるときは善は益善にして惡は益惡あるが如し。然り實に然り一個人の上よりすれば此區別判然たらんとを要し、何人と雖ども惡を惡として善を取らざるべからず。然りと雖ども社會の萬物は皆必要より生じ一物として無用あるものあり故に惡も又必要あり否時に因て善とあるとあり毒石も病者に向つて良藥とあるが如し。又世人の稱して善とあり惡とある所のものにして其實を失ふと多

二  
し今社會の外に立て之を達看すれば萬物自ら善惡の性質を有するものにあらず唯——其適用の如何にあるのみ——人は萬物の主人あり萬物唯人の命に従つて其用を爲す其用の善あるは則ち其人の賢を見るべく其用の惡あるは其人の愚あるを證するに足る然るに實際に於て事物の成敗を見る毎に人多くは己れを咎むるを爲さずして却て其事物を咎む茲に於てか一般事物に向つて善惡の性質を具有するが如きの様を爲すに至れり世人の稱して善事中の至善と爲すものは惠與にあり惠與は自他を益す與ふるもの、心を樂ましめ又た受くるもの、心を喜ばしむ、されど其實情を察知せずして妄に之を爲せば己れの心を害し人の心を亂すに至り却て社會をして詐僞偏誦の風を養はしむ。又人を殺すは惡事中の最惡あるものあり、されど故なく我生命を害せんとするものあれば身の爲め社會の爲めに其人を殺すの善事たるを知るべきあり。

三  
夫れ革命は社會の一大事あり之を論ずるもの常に斷へざれば之を思ふもの又終に絶へず、人其性質の善あるや惡あるやを問ふものあり或は其形の恐ろしきを見て嫌ふものあり或は其心の勇ましきを見て喜ぶものあり——共に是れ腐儒の見解のみ志士の事を爲さんとする唯時の如何を見るのみ——勝てば官軍負くれば敵よ進めや進めイザ進め——と叫ぶときは官軍と朝敵との間は一轉して達し得べきが如し、されど此間には無限の哲理を含めり則ち時を見るの活識を以て機に乗じたる以上に非らざれば、官軍と朝敵は則ち官軍と朝敵あり、其間自ら千仞の懸隔ありて容易に達し得べきに非らず、革命を妄にするものは無上の愚人にして革命を時にするものは無上の智者あり、甲は一身を沈淪せしめて邦家を毒害するに至り乙は其光榮を日月と同ふして永く邦家を照すとを得。創造以來六千年基督以降十七世紀の末に至つて各國政事上の天地は眠

れり、人民は専制暴虐の中に首を伏して唯々諾々、陳々腐々の空氣を呼吸せり。人民を保護すべきの政府は敵に與して人民を窘逐するの政府とあれり。凡そ社會の元則として陰陽和を得ざれば蘇々の響を發す、而して其和を得ざると愈よ大あらば其音を爲すや愈よ大あり、今や百雷一聲北米の天に轟くかと思ししが雷光再閃忽ち佛國の地上に落ちたり、破裂したり其音に應じて百鬼躍出血を吸ひ骨を噛み天心を挫き地軸を抜くの大看を呈出し、幾多の志士は彼の基督の如くに十字架あらぬ斷頭臺に生首を殘し其身は燦爛たる光輝を放ちて史上に復活せり、實に其事は恐ろしかりし。されど米國の獨立佛國の革命も雨晴れ風止みて後思ひ見れば豈に圖らんや則ち是れ世界文明の曉あらんとは、さて此斷頭臺に登らんが爲に産れ來り女子の身を以て傑士の魁を爲せしものはゼーチ、フヒレポソ字はマナン則ち後のローランド夫人あり。

其二

十七世紀の末にパリに彫刻師あり名をケイティン、フヒレポソと云ひ妻をマーガレットと呼ぶ、物事華美を尙び風流を競ふパリスのと故世は不景氣と云ひあがら彫刻の業は盛にして時により意外の利潤を得るとありしかば、始めは何不足なく活し居けるがフヒレポソは其の性急に、一攫千金の望み絶へず遂に從來馴れに馴れたる彫刻の業を棄て身に經驗をくして事の尤も危険ある投機の業を始めたり。眼先に追はれて前後を顧みず次第に深海に入るは此業を爲す者の常あり、一時金を都合してダイヤモンドの買賣を爲し以て金穴家たらんとを期せしが果は十中の七八は失敗と定りたる其中に陥り、今は漸く身代を傾くるに至れり。妻マーガレットは其性全く夫に反し温順貞節にして、能く家を守りパリスの婦人に似もやらず交際社會に出入するを好まず、己れの母を見舞ひ夫

の親戚を訪ひ教會に到るの外は殆ど外出するとさへあかりし。夫婦の間に七子を擧げしが生存するもの唯一女あるのみ則ちマナンあり。マナンは千七百五十四年三月十七日(今より百卅八年前)を以て生れ、恰も彼のルイ十六世と同年あり。當時一般の習慣に従ひマナンは田舎に於て乳母の養育する所とあり二歳の後に至て父母の家に歸れり。天性英敏にして四歳の折には筆を執て紙面に向ひ分らずるがらも何やら書連ね、獨りホク／＼喜び居たるが、時に氣に叶はぬとありて泣き叫ぶも書物を與ふるときは直に泣き止み、笑聲を放つて之を讀む真似を爲せしとか。己に斯かる傾向ありしを以てマナンが筆を弄び書物に對するときは心餘念なきが如く、呼べども答へず、強て連れ行かんとすれば小さる机にしがみ付泣きもがきて止まざりける。六歳の時ありしマナンは風邪に罹りし故母は藥を與へんとて茶碗に盛り持ち來りしに小兒の常として之を嫌ひ飲

まざりければ、母は種々説き勸めしも、イツカナ聽かず、偶ま父の入り來るに會せしが、父は此様を見るより鞭を執りて脅かせしに、マナンは聽かず依て父は思はず一鞭を加へたり、其鞭烈しく當りしかばマナンは痛に堪へ兼ねて一聲アット叫びたれども尙之を飲むとを肯せず、母の差し出す茶碗を顛へし去らんとするにぞ父は又其手を打ちしに、六歳のマナンは今迄は泣き聲を止めたり、忽ち床より飛び下り、柱に依り——打てば打て殺せば殺せ——といはんばかりの覺悟を以て身構へければ母は大に驚き父を擁して室外に立ち去りたり。此時マナンの眼付は爛々として深く両親の心を射るばかりありし、暫らくにして母は室に入り來り再び事譯を説き聽かせて靜に藥を飲まんとを勸めしに、マナンも慈愛の語に涙を催ふし涙と共に之を飲み去りけるが、父も自ら其所置の殘酷ありしを耻ぢ是れより後はマナン一切の教育を母に一任するに至れり。



七歳の時に至りマナンは教會に屬する日曜學校に入りて初步を學び、常日は母に就き或は祖母に依りてラテン其他の事をも學びしが、此時よりしてマナンは非常の朝起とあり薄す暗き時より私かに母の書棚を探して書物を取り出し之を読み只管文讀む道をたどりしかば、其進歩至て速にして教師の賞辭を蒙むると多く、マナンの頭は已に業に熟せしにや其言ふ所はあどけなきも其内に種々の道理を含めり、或る時教師が試に人は何物が造りしやと問ひしに、マナンは神が造りたりと答へたり、依て教師は又其神は誰が造りしやと問ひしに、マナンは人は人と神との關係を知るとを得然れ共神と他物との關係は問ふべき限りに非すと答へたりとか。

### 其三

群綠叢中已に松柏の他と異なる所あるを見る。マナンは未だ十歳あらざるに能く普通の書を解せり、好んで各國の風土記を読み其人情風俗の異同を探り、或は偉人烈婦の小傳等を讀みて深く自ら解得する所あるが如くありし。九歳の時マナンは頻に新しき書物を望み家内を探がせしに、圖らず一書を得たりマナン大に喜び讀んで寢食を忘るゝ程ありしに、母は之を氣遣ひ何事を爲し居るにやと私かに窺ひ見れば、マナンの讀む所は則ち彼の有名なるプリユターチの著ありし。マナンは之に因りて以て羅馬興亡の跡を知り英雄成敗の實を詳にし、且つ政体中共和政治の尤も完全あるものあるを思へり。プリユターチはマナンが爲の嚮導とあれりマナンは之を枕にして寝ね之を懷にして出で、少時間も手放せしとありし、其の次にマナンの手に入りし物はホルテアの著あり、一日マナン頻に之を讀み居たる折一婦人の來るあり、暫らく母と話せし末、不圖マナンの書物に眼を止め其ホルテアあるを知りしかば、驚きあがら、斯か

る女子に之を讀ましむるは甚だよろしからずと告げれば、母も其議に従ひ書物を取上げて書棚の中に收めたり、已にして其婦人歸りしにマナンは又私に書棚に馳せ入り之を取り出し來りて一層の注意を加へて研窮せり。母は此事を知りしかども敢て咎めず、此女子にして到底此書を解し得るの理なしと信じければあり。されどもマナンは之を玩味せり、分拆せり、以て後日ルーソー等の著を讀むの道に向つて供へたり。

マナンは日曜の午後には概ね常にチユーラリーの公園に遊べり。母は自ら華美を好まざりしかどもマナンが爲には大に心を用ぬ恰も雛人形の如くに飾り立てたり、則ち流行の眞先を追ふて衣服調度を爲し中高の靴には純金の鈕を箝め、新麥藁の彩帽に數尺の鮮毛をかざして、前額にバラの花を咲かしめ、以つて公園を徘徊するの様は人目を奪ふばかりありしされどマナンは母の命に従つて止むを得ず爲せしものにて毫も之を好

みしに非ず、心は早く家に歸りて讀書に従事せんとを望めり、已にしてマナンは少しく其心の方針を變ずるの機に會せり、或る時教會に於て數人の兒女と共に教師の前に立ちしに、教師は一の疑問を發したり、他の兒女等は常に師父より聽き居たとありしを以て容易に答を爲したれどもマナンは是れまで他書に心を寄せ、バイブルを知らず、故を以て答を爲すと能はざりし。此瞬間にマナンの心に生じたる混雜はマナンをして臍を噛ましめたり、マナンは之を以て一生の耻辱と思へり、家に歸るや否や直にバイブルを取り出し頻に勉強せしが、一心の在る所意義自ら通ず、加ふるにマナンが哲學上の思考力は之を助て明にし、信仰の不可思議ある勢力あるを思ひ、未來の果して然るや否やを考へ、茲に始めて人生の一大問題に着目するに至れり。此時までマナンは宗教を確信せざりし、今や之を確信せんとを勉めり、此心を以て古聖賢の傳記を讀み、此心を以て致命者

の血痕を探り、大に悟る所あり、則ち自ら身を以て之に委ねんとを期し、數日苦心の後、マナンは突然馳せ行きて、兩親の膝下に伏せり。マナンは此時滿腔の情と、双眼の涙とに濡されて、暫ばし言ふと能はざりし。兩親は此様を見て驚き、扶け起して其故を問ひしに、マナンは漸く顔を舉げて曰く、願くは我が身を以て尼寺に入らしめよと。兩親黙して言ふ顔を見合せ居たりしが、母は徐に問ふて曰く、何故にそちは斯かる望を生ぜしかと、マナン容を正して曰く、我は彼の處に於て深くバイナルを研究し以て古聖の跡を追はんことを望むありと。蓋し當時尼寺に入るものは必ずしも一生を此中に送るに非らず、業成れば再び世に出づるを得るを以て、父母は之を許せり、時にマナンは僅に十一歳ありし。

## 其 四

周圍を渡る石壁は數丈の高きに達して、車馬の聲を絶ち、四面を攀づる蔓

草は絶へ間なきまでに繁茂し、外は紅塵を防ぎて内は清淨の氣を蓄ふ、茲にマナンは將に開かんとする蕾の身を以て、靜に古代の石路を踏み、何處も同じ緑の草木に對して、人生の異同あるを考へ、あれやこれやのよしあし事を未來の一望に附し去つて問はず、衆と共にオルガンの音に耳をすまして上帝に對し、唱歌の聲に心を凝して、身の安全を祈る。實に寺院は人生の別世界あり。マナンは居ると數日、其心大に變れり、父母にして妨ぐるとあくんば、一生を斯くや送らんものと思へり。已に此心を以て人々の間に交りければ、人々も又マナンを愛顧して措かず、地狭ければ情密あり、病を問て憐れを慰するは勿論、共產主義を實行して人敢て妨ぐるものあく、特にマナンの爲には、需に應じて書物等を自由に供給するものさへありければ、マナンは人生の處し易きを覺へ、又——愛——の一字、人心に向つて無限の功力を有するを知れり。

此寺の中に於てマナンの尤も親しく交際せしものはソフヒあり。ソフヒはマナンに後るゝと數月、茲に入り來りしものにて其齡はマナンより長ずること三歳、ソフヒは恰もマナンと同一の食卓に就きたり、朋友の相知る又奇ある者あり、他に幾多の女子此卓を共にせしにも拘はらず、一目見るより二人は何となくあつかしき心地せり。共に語りて意氣相投じ何事も同感を見はせしかば、二人の喜び大方おろす、元此處に來るものは始め數日間は奇怪の境遇に苦しめらるゝものあるが、ソフヒはマナンと相知るとを得て心のうやむやを晴らし、始めより喜と望の中に立てり。是より二人は心を合せずして自ら合ひ、一身同體の如く共に讀み共に働き、閑あるときは手を連ねて庭園を徜徉し花に對し蝶に伴ひ快樂の歳月を送りたり。

然るに父母は永くマナンが尼寺に在ることを許さず一年半を経て強いてマナンを連れ歸り祖母の許に送りて裁縫等を習はしめ併せて社交應接の法を學ばしめたり。さてマナンは十七の春に於て再び家に歸へりしが實際社會の經驗を得て今や其思想も發達せり、或る時一書を裁してソフヒに贈りて曰く學問中の學問は我が身を知るに在るとかや、世界の萬物は各其用を以て人に供す、人は萬物の靈あり然れども人は自ら何が爲に生れ來つて何が爲に働き何が爲に逝くかを知らざるもの多し、世人は何が爲に歴史を讀み何が爲に學術を學ぶか、我は是れまで文字の外面を讀むとを勉めり然し今は内部を講究するに至れり。人は頼みなきものゝ如くあれども又頼みあるものあり社會は危險の如くあれども實は安全あるものあり、人は働くべきものあり社會は進むべきものあり、思ひしとを實行せよ、一は敗るゝも二は成るものあり、人の目的とする所は智識に非らず名譽に非らず唯功業のみ、よろしく功業を以て祖先の功業に積み

重ね、後人をして又之に習はしむべきあり。停滯は進歩の敵にして、則ち社會の敵あり。社會はよろしく流水の如くあるべし。溜水の如くあるべからず。又——人の身は一輪車に乗りにけり。進めば立ち進まねば倒る——と其言ふ所彼のゲーテの人生哲學に似たるものあり。

## 其五

マナンが尼寺を去りし後、ソフヒも亦出で、家に歸へりしが、ソフヒは早や社交の塵に染められて、此處の夜會、彼處の舞蹈に連なり、落花流水の情を寄するに至りければ、マナンは之を聞いて戒めて曰く、嗚呼、爾も亦斯くの如きとを爲すか。見よ、舞蹈場は男子が情慾の馬に鞭ちて迷妄の女子を狩する所に非らずや。爾は舞蹈の様を見て喜ぶか。我は之を以て人間の醜態を畫き出したる戯畫の如くに思へり。茲に臨むの女子は夜會の餌にづられて、其身を賣り、其身を賣りて而して男子の奴隸たらんとを望むもの

あり。男女の地位は固と同一にして、且つ女子は其美を以て、其心を以て、能く男子を制するに足るの力を有するものあり。是れを思はず、一場の娛樂の爲に、此美と此心を併せて、男子が足下の塵埃に附す。嘆すべきの至りあらずや。我は實に女子が今日の習慣を來せしものは、自暴自棄の致す所あるを知り、爾等と力を合せて回復せんとを望めり。然るに今爾にして此事を爲す。我は將來誰に向てか談せん。マナンが考は斯くの如くありしも、千里同一の春風は、又徐ろにマナンが身に吹き寄せて、漸く其心を融解するの時とはありぬ。マナンは自ら悟りて、飽くまでも心を堅く閉ぢたれど、自然の花の顔は正に満開にして、蔽ふべくもあらざりし。マナンの丈は、スラリと高くして、肉は中肉、顔色健康の艶を帯び、頭髮濃くして、軟かに、唯鼻は少しく高きに過ぎて、よろしきを失ひ、口は少しく大に過ぎて、取瑾を見はしたり。要するに、マナンは世の多數者の所謂美人に非らざりしかども、

其動くや法に叶ひ其行くや度あり、一度口を開くときは言語は眞珠を連ねしばかりの齒を出で、抑揚あり頓挫あり、能く感情の導く所に従つて其音聲を異にし、尤も完全なる樂器と同じく、怒るとき呼ぶとき諭するとき飄するとき一々其度に叶ひて人をして無限の感情を起さしむ斯くてマナンは少年子の心を動かす如きの舉動は毫もあかりしも満室蒼蠅拂難去は人の世の中、加ふるに當時パリスの人氣は何となく勇み立ちマナンの如き容貌風采は却て畫家の材料とあるの時ありければ之を慕ふて訪ひ來る者次第に多く、始の内はうるさきと思ひて、よしむに斷り、淡泊の應接を爲し居たりしが、思へば思はるゝ人心、マナンも心の中に情の力一部を占むるに至りければ、茲に疑の藪々を湧出し來りて晴れ渡りたる四月の空も早や曇り克ある五月雨の時とはありぬ。物事を哲學上の眼光より判斷し來りたるマナンは今は我が身の實地問題に付て深く心を碎け

り。マナンは偏僻ある舊教の中に人と爲りしかば、情慾を以て良心と共に天を戴くべからざるの大敵とあし飽くまでも之れを滅絶せざるべからざるものと思ひ——未だ情慾は到底滅絶する能はざるものにて之を制御するの外、道なきの理を知らざりしあり。マナンは之を道理に尋ねて得ず、實際に行ふて能はざりければ、此上は神の力に依るの外あしと決せり。則ち古聖の爲に倣ふて深夜に床を脱し冷水の中に身をひたすと三度以て情慾を心の外に去らんとを祈願せり。されど其の効を奏すること能はざりし、マナンは屈せず或は食を斷ち或は室内に籠りて祈禱を爲したれども遂に其の目的を達するを得ず、則ち心を決して詳細を僧侶に告げ其法を求めしに僧侶はマナンの已に爲せし處を以て望むに過ぎざりければ、マナンの心は大に惑へり。此惑は漸く生長してマナンは無形の事は分らぬものあり、古聖の言も信するに足らず、神は知るべからざるものあり

この論結を來し、基督教の制裁は漸くマナンの心を去れり。是れ則ち舊教が廣大無邊の天に向つて局小の神を書き出せしに由る世の宗教を信ずるもの願くは爾の神を大にせよ。

## 其 六

ルイイス十五世天然痘の襲ふ所とありて再び起つ能はずとの報、一度ナムーラリーの外に漏るゝやパリスの寶玉商をして泣かしめフランスの志士をして笑を含ましめたり。マナンは此時に至るまで心は哲學の範圍を出でず思ふ所は道德上の事に止まり一身の處し難きに苦み憂鬱の中に沈み居りしが今此事を聴き始めて眼を社會政治の上に注ぎ何故にルイイス十五世の死は寶玉商をして泣かしめ志士をして喜ばしむるかを知らんと欲せり。マナンが此志を起すと同時にルイイス十六世を助けて佛國の朝廷に立ちし者は女后マリー、アンテオチテあり。奇遇にもマナ

ンとマリーとは等しく青春の身を以て反對の點より慘怛悲哀の活劇場に進めり。實に反對あり一は一天萬乗の雲井か一は卑賤ある彫刻場か、一は耻辱の斷頭臺に向て一は名譽の斷頭臺に向て歩めり。革命も起らざらめやマナンは天爵の女王にして低く、マリーは人爵の女王にして高し。天地已に其位を失せり、マリーの心を支配する所は衣服の美と寶石の光とのみ、ジャンペーンの意の如く湧き來るを見ては國內に泉源あるを察し、宮殿の廣壯あるを見ては天地の無盡藏あるを思ひ、而して今年の收穫は去歲粒々辛苦の結果あるを知らず。道に飢餓するものありと聞けば笑つて云ふ世間には怠惰ある者もあるもの哉。何故に彼等はナイフを以て肉を切りホーンを以て口に入るゝを爲さざるかと。知らぬが佛か、此佛を戴く佛國人民こそ因果をれ。實に人生字を知るは禍の始め博愛の心は多愛の基あり。マナンは佛國の社會を見て嘆息せり。大息せり。長大息せり。而し

て今や此長大息をして管に長大息に止まらしめざるの場合に臨めり。一千七百七十四年の秋に於てマナンは母と共にヴェルサイユに至り許可を得て王宮に臨めり。マナンは始めて王者の威嚴に接せり、然れども此威嚴はマナンの眼には威嚴あらざりし、カードを弄する所玉突を爲すの室音曲を聴き、舞踏を見てマナンは耳を聳せり、眼を眩せり、食する所のもの飲む所のもの一口千金、一朝の資を癩せば萬口を養ふに足るべし。マナンは群衆と共に制止の聲の下に立て、女后マリーの通行を目撃せり、金は石、銀は瓦、ダイヤモンドの價は數百萬フランあり、マナンは見て思はず頭を下げたり、何が爲に頭を下げるか、女后が錦繡の衣に龍蛇の裁縫はマナンが目には眞に蛇蝎の如くありし、マナンは匆々母を促して宮殿を出で、清淨の氣に對して一息と思ひしに、茲に亦反對の現象を目撃せり。五六の婦人は二三の小兒と共に襪の衣服も身を蔽ふに足らず、王者の爲

に食を斷つと已に數日あるべし。足許の締りあきは泥醉者に異あらざるも顔色の青ざめたるは酒氣を帯ぶるを證せず、狂人か亂人か、然り狂人あり亂人あり窮して而して亂し飢て而して狂せしものあり。彼等は呼べり叫べり哀を乞へり而して今は聲涸たり。マナンは此様を見て心を破れり胆を碎けり、然れどもパリスの巡查は勇士あり、忽ち棍棒を振つて彼等を追ひ散らせり、叱して曰く——茲は宮殿じや貴様等の來る所に非ず——とマナンは家に歸りて殆ど病めり、母其由を問ふ、只答へて曰く——我は速に我家に歸へりしことを喜ぶと。

## 其 七

已にしてマナンは謂へらく上見るも限なく下見るも又限なし、此限りあきの事に向つて限りあきの思想を費すも限りあきとありと、依て憂苦の心に湧き來るときは或は郊外に散策を試み、或は風月に思想を寄せ、以て



其時を遣りしが、今は次第に浮世の心を打ち忘れて心平和を保つに至れり。マナンは一日閑を得てミユードンに向へり。ミユードンはパリスを去ると數里にして塵外の一小桃源あり。曾て園丁の壓制を知らざる天然の樹木は四方に其手を伸して雨露を掬し、喬木灌木相雜居して敢て自他の間風枝を鳴らさず、自由に新鮮の空氣を呼吸して足らざるとをかこつことあり。中に數多の小池あり、滿林の根幹を濕すの水は又小魚の生息游泳するを禁ぜず、波靜にして鮮魚の跳るは敬意を天に致すあるべく、時閑にして蛙の鳴くは太平を歌ふあるべし。是れを歩を進めて松並木の道を通過すれば開いて傘の如きは旅人の雨を避くるに適すべく、亭々突兀九天に朝するものは王者の頭を屈せしむるに足る。此間にマナンは根到三九泉、無曲處、世間唯有蟄龍知、てふ一身を捧けて靜に芳草を踏み、行く處に任せて歩を轉すれば、知らず知らざるの間に知らざるの郷に到れり。忽ち見

るカラマツの生垣は半ば開ひて屏風の如く、影に二人の小兒あり、齡は四歳と六歳との間あるべく、被服の粗あるにも似もやらず、其顔はツツくとして愛らしく、餘念なく花卉を弄ぶの様は世の所謂仙童にもやあらんと疑はる。玆を隔て、七八間、一小屋あり、丸木の柱に破竹の壁、人もや在ると尋ぬるに家の中には聲なくして其の後邊に聲しければ、則ち歩を進めしに、兩人あり、男は畑を耕し、女は草を去れり。マナンを見て怪しみあがら來意を問ふ。マナンは告ぐるに、次第を以てし、先づ此地の名を問ひしに、妻は恭しく立ち上がりて、地の名をヒル、ポーンと云ひ且つ、彼等は此處にて溝渠の水源を守るものあるとを告げたり。時にマナンは至て空腹ありければ、食を求めしに、彼等は喜んで之を諾し、屋後にある自然の小亭に伴ひ、目の前に生ひ茂れる野菜類を取り、産みたての玉子を持ち來りて調理し、マナンを饗應しければ、マナンは其厚意を謝しつゝ、之を味ひしに、其味は

美にして都市に得る所のものに比すれば大に相違あり。マナンは夫妻に向て斯かる處に住むは人間快樂の極あるべしと稱へしに、夫は手を拍ちて——令嬢の意我が心を得たり、我々は曾てパリヌに住めり然れどもパリヌの空氣は下層稠密の處より上層稀薄の處に至るまで盡く腐敗せり觸るゝ處のもの接する所の事皆自由を妨げ權利を壓せざるはあし、パリヌの都は美は即ち美あり然れども我等が爲には、膝を容るゝの家は狭きも、此天地の遙に廣大あるを覺ゆるあり。ざるにても貴嬢の心は他と異なる。令嬢夫人の此處に來るものは甚だ稀あれども偶ま來るときは路に迷ふて寂莫無聊をかこつ人のみ、然るに今貴嬢は直に以て住み易きの地と爲す、其説を聽くことを許さるべきかと述べたてければ、マナンは心に此者又已に世故に經驗あり自由の棲む所を以て我が郷とあす人あるを知り胸襟を開陳せんと思ひしが、ト之を語るの轉た憂鬱を増すに過ぎ

ざるを心付きければ、笑つて——我は未だ世の塵に染みしとあければ思み嫌ふべきものもあし、唯天性斯かる處を好むのみと言ひ終り、時刻も次第に移りしかば他日再び來たる事もあらんと立ち出でしに、彼等は最と町寧に挨拶して數哩の道を人里近きまで送り來りしとぞ。

## 其 八

實に人生は奇しきものあり、自然の力は驚くべきものあり、今はマナンが彼れ是れの考も一掃し去らるゝの時とはあれり、先つ頃よりして母の健康常ならず、さきだに内氣の心兎角引き込み勝にて戶外に出る事さへもあきに至りしが、外を内ある父の身持は之れを氣附かず、偶たま家に歸るとあるも枯木の如き身代に浮き立つ花の咲くべきやうもあく、互に氣まづきとのみあれば、時としては夫婦の間に争の端を開くとあり、痛く母の心を痛めければ、其身は次第に此世の終に向つて歩を早めたり、母は自

ら此事を知れり、されど外面より見るときはさほどの事もあらざりければ、父もマナンも斯くとは夢にも知らざりし。此時母の心を支配するものは唯マナンの身の上あり、母はマナンの顔を見る毎に眼に涙を浮べて其行末を案ずるものゝ如くありしが、疑もあくマナンを良家に嫁せしめて安全の一生を送らしめんとを希圖したるあり。然るにマナンは婚姻の話、を聴く毎に空吹く風を聞き流して、忽ち野外に遊び清水に耳を洗ふ程ありしが、早や二十の坂を一越へて三十路に向ふの始とはありければ、一日母はマナンを己の室に招き、詳に次第を説き明かして、或る人に嫁せんとを勧めしにマナン——併し母上よ、我れは無智の夫を持つて之を守護するの勞を厭ふあり、彼れは子供にしては大き過ぎるし、教ゆるには鈍し、一生のもちあつかひたるに過ぎざるべし。母——人を支配するものは能く之を支配するを得、併し少しく自ら省みよ。マナン——願くは少しく我

の心をも汲み取られよ、我れ我が自由を妨ぐるの夫を要せず、是れ唯我をして抵抗を爲さしむるのみあり、されど我れは又敢て人の自由を妨げんとを欲するものにもあらず、故に我が身の上よりすれば、婚姻は自他に益する所あらず。今世の男子を見るに多くは六尺有韜の兒童のみ、氣節なく氣力なく、只利の在る所に向つて頭を屈し、義を見て逃げ事に遭ふて驚き、殆ど一身を支ふるの力あるものなき。女子の男子に嫁するは、波風荒らき世の中の保護を托せん爲にあらずや、然るに彼等の所爲斯の如し、却て石を負ふて深きに沈むの結果を見んとす、是れ我れの婚姻を躊躇して母上の命にも従ひ難き次第ありと。

已にして數日母は再び折を見てマナンに向ひ、女子は盛りの時を經過すれば、散り行く花と共に人の顧みるものなきに至るべし、爾は已に二十を越へたり、今にして夫を定めずんば、遂に孤獨の一生を送るに終るべきを

りと、されどマナンは意とせざりしかば母は少しく怒ら立つ色を示して語ば鋭く説き勸めしに、マナンも其意の平均を失ひ突然——母上は婚姻の爲に果して幾許の利益を得しかと叫びたり。母は此言を聴て又言はず、マナンの心には格別の意味を含みしにあらざりしかども母の胸には深く對へたり。後一二ヶ月を経て一日マナンは知人を見舞はんとて出で行きしに、忽ち急報に接して馳せ歸れり。マナンは夢中に家に入り夢中に二階に上ぼり、見れば個は麼も如何に個は如何に母は椅子に倚つて眼をパツナリと見開き、口は已に閉づるの力を失ひ、双手は垂れて僅に膝の上に在り、マナンを見るより何をか云はんとしたれども叶はず、手をもがきたれども動かさず、唯マナンの顔をあがめてホロリと涙を滴らせしのみ。此の時マナンは不幸の悔悟と報恩の感情とは一時に身に迫り、心の丈けを打ち盡して介抱を加へ、又人を馳せて父を迎ひ醫を招きしが父來り

醫來たり、僧侶來るときは、夕陽已に傾きて山の端に名残りを止とめ、暗闇は常より早く襲ひ來りしかば、マナンは燭を取つて人々の中に立ち、母の顔を見つめてハット思ひ忽ち燭と共に絶息せり。人々は驚きに驚きを重ね、再び燭を取つて兩人を介抱せしに、マナンの己れに歸るの時は早や母の此の世を去るときありし。

## 其 九

母の死後數月間マナンは悲哀の海に沈み愁嘆の淵に溺れて殆ど爲す所を知らざりしが、知人ありルースーの著を持ち來つてマナンに與へ之を讀んで愛辭を分たしめんとせしに、始の程は泣きはらしたる眼の物を視るにも、のうく手に取るとだもせざりしが、月日の立つに従つて心も次第に元へ歸り且つルースーの著讀むべきの價值あるとに心付きしかば、則ち之を取つて讀み見るに其心に叫ひけん、次第に他事を忘れて玩味し果

ては之に對して手の舞ひ足の踏む所を知らざるに至れり。ルーソーは當時尙ほ存命ありしが已に人生の義務を盡し去りて餘生を閑散に送るに過ぎざりし、さて今マナンは氏の著を讀んで氏を慕ふと神の如く傳手を求めて一度氏に而會せんとを願へり。恰もマナンの知人中にルーソーに依て一樂譜を作らんとするものありければ、マナンは自ら此任に當り、豫め一書を裁してルーソーに送り日を期して對面せんとを約せり。體て其日とありければ、マナンは飛立つばかり足を早めてパリスの都を横ぎりルーゾットリアと稱する所にルーソーの家を訪ひ神殿に入るが如きの心地を以ておとあひしに、出で來し者は五十路を過ぎしばかりの老女小奇麗ある着物に白き前掛を掛け頭に眞丸の帽を被り何となく嚴格の處あり。マナンは恭く——ルーソー様の御宅は此方で御座りますか老女——御意の通りマナン——御目に懸るとが出來ませうか老女——御用

はマナン——私は少し御願がありましたして先日書面を差上置きました者ですが御返辭を伺はふと思まして老女——ルーソーは當時をあたにも御目に懸りませんから其趣をあなたに依頼せし人にお話しく下さい、慥か彼の手紙はあなたの書たのでは御座りませぬいマナン——御免下さい併し——併し——老女——手跡が男の書に相違ありませんマナン——失禮ながらか疑あれば書いてお目に掛けませうか、老女は頭を振りながら——イヤ、それには及びませぬ、唯あなたに巾上げる次第は夫儀は近頃メツキリ老衰致しまして何事も致しませんから此の次第を御承知下さいマナン——左様で御座りますか實は、一度ルーソー様にお目に懸りて口づから御返辭を戴き旁々平素尊信の意を致さうと思ひましたが左様の儀あればあなたからどうぞよろしくと言ひ棄て、辭し歸りしに老女も亦マナンを見送りて目禮したり。

此の時に當つてルーソーは已に老ひたり、又昔日の氣力あるまじ。ルーソーは一生の事業に於て非常に知人を得しが、又非常に敵を有せり、而して今や敵を恐るゝとを知りて知人と提携するを知らず、人を見れば直に敵とあし之に接するを爲さざりし。マナンはルーソーの著に依て感化せられ之を徳として以て尊敬の情と報恩の意とを致さんと欲し、遂々尋ね來りしに、ムゲに之を拒絶せしめて自ら路傍の石地蔵を學べり。嗚呼ルーソー、爾は爾の心を受けつぎたる爾の娘が爾を慕ふて尋ね來りしとを知らざりしか、爾にしてもし今まマナンを知り其心骨を見、己れの説を他日佛國の社會に實行する者あるとを知らば、爾は爾の餘生希望とを快樂の中に送るを得しあるべし、然るに僅に一壁を隔て、相會はず始にして而も終あるの好機を失ひしは實に千歳の遺憾に非らずや。是れより數月の後則ち千七百七十八年に至り、曾て口頭氣焰を吐き全世界の人心を類

焼せしめたるのルーソーは死せり、落胆阻喪の中に死せり、英雄の末路亦奇ある哉。

## 其 十

米國の女子男子に對して將に婚姻を承諾せんとするに當つてや——ヨシ來々——と云はんばかりの意氣を以て握手の下に決定し去り、英國の女子は——黙して答へず——以て承認の辭に代へ、佛國の女子は已れに異議なければ單に——父に問へ——と答ふるとか。蓋し是れ一般の有様を概言したるものあり、マナンは已に常人に非らず其爲す所又常人と異なる。マナンは哲理上よりして婚姻の利害を講究せり、謂へらく夫を持つとは煩雜の基にして子を教育するは國を治するよりも難きものありと、マナンは一生婚姻せざらんとを思ひしが、母の此世を去りしより身に打かゝる困難は憂世の憂に、かてゝ加へて杖柱とも頼む父上は愈々益々岐路

にさまよひ此處のゴッフヒー店彼處の酒屋と日を夜に續ぎて稼ぐとあ  
く費ひ果すにぞさきだに羽ありて飛ぶが習ひの金銀は此家の中に足  
を止めず父と共に歸り來ると稀ありしかばマナンの憂慮は一方あら  
ずマナンが多年鍊へ得てプリユターナルソーの思想を籠めたる腦髓  
も如何ともすべき道なく世は様々と變り克ある十月の空に朝に星を戴  
きて家を出で清淨玉に似たるの身を以て紛塵の中に奔走し眼鏡を賣り  
時計のガラスを磨き月を踏んで家に歸るを常とするに至れり茲に於て  
か實地の推理はマナンの心を變じて始めて——旅は道連世はあさげ——  
の至言あるを悟り自他相依るの必要を感じしかば今は相應の人を得一  
生の苦樂を分たんと決せり。

斯く思ひ定めても思想あるマナンの胸には婚姻のとは中々容易ならず  
長し短しは物の常にして求めざる時に多きやうにして求むる時に少き

は獨り武藏野の摘菜のみに非らず婚姻は其の利害の關する所夫にして  
妻其人を得ざれば六十年不作の虞あるが如く妻にして夫其人を得ざれ  
ば百年の苦難を一身に負ふの悔なきに非らず依てマナンは是に向つて  
又種々の苦心を爲せしが愛友あるソフヒは天に代りてマナンが將來の  
所天ローランドを紹介し來れり其書に親愛あるマナンよ爾は此書と共  
に此人に接するあらん此人は我が知人中に於て尤も快活にして古今に  
通じ常に道德の伴とあり正義の中に立つの人あり併し彼に一癖あり古  
を尙び今を難ずると是れあり此癖は爾の所謂佳癖あるものあれば幸に  
胸襟を談せば亦相益し相慰むるとあるべきありと。

千七百七十六年一月初旬に於てマナンは始めてローランドに面會せり  
此時ローランドは齡已に四十に近し背高く牀度を得たれども顔色は早  
や勞苦の磨擦し去る所とありて甞に昔日の面影を止め頭髮半ば落ち

前類は殊に疎にして僅に毫毛の名残を惜み衣服は清きを旨として華文の見るべきを、舉動は已に耻かし氣を離れて落磊自在あり、されど其の口を開き事物を談じ道理を説き當世の事務を論ずるに至つては心次第に激昂して勇氣勃々天地を蓋ふに足るものあり、一度氏に接してマナンは稍其品位あり識見あるの士あるとを知れり、又同時に其議論の稍々狹隘にして自然に反する所あるを氣付たり、マナンは此時に於て毫も此人を慕ふの意はあかりし、謂へらくローランドは瓦石間のグラスのみ、グラスは一見玉を欺くとあり然れども之を熟視すればグラスは則ちグラスたるに過ぎずと蓋し人相會して一見の下に評せし語は何人も誤謬なきを保する能はざるあり。

## 其十一

眼やみ女に風ひき男は格別の風致あるものありとかいへど船よひ男に

風ひき女は人の厭惡を招くとぞ云へり、先きにマナンは彼のローランドに面會せしもマナンの見る所や淺かりけん、ローランドの思ふ所や深かりけん、後者は前者を再び訪ひ來れり、折りしもマナンは風邪の襲ふ所とありて激しく頭痛を覺へけれど、遠來の客あれば彼の意を空するも我が意に非らず、則ち出で、彼に接したり、然るにマナンは心配と苦痛との攻むる所とありて話すとも兎角に浮きたらず、數々顔をしがむるとさへありければ、好む眼には西施の翠あるべけれども、他人より見れば見苦しきは勿論あり、加ふるに父は此の時偶ま家に在りしも、マナンを見ること昔日の如くあらず、目前客に對して不敬を顧みざるの所爲さへありければ、流石のマナンも心之が爲に亂れて少く其平均を失ひたり、元來マナンは會話に長じたる女子あり、人をして自由に其の好む所を話し適宜の疑問を放つて其語をして益々佳境に入らしめ、其終るを待つて徐に己の所見



を開陳し圓滑の間に自他の是非を較するを常とせしが、今ローランドに對して話を爲すに當り、妄りに語り妄りに攻撃せしに賣り語に買ひ語、ローランドも又マナンの意に反してプリユターナ等の著を罵詈せしにぞ、才子佳人を訪ふの意は胸を拂ふて最と殺風景の感情を止めて相別るゝに至れり、然れども斯く思ひしは他人の考あり、ローランドの意は然らず、氏は已に世故に長ぜり、一顰笑の中に未來の夫人を棄てざりし、氏は數日を経て再びマナンを訪ひ來れり、是に於てかマナンが血氣の心も氏が持久の念に打ち克たれたり、今回の談話は前に比して全く異なり、互に胸襟を開き心情を談じ和氣洋々たりし。

ローランドは佛國を去つて暫らく伊國に遊びしが、此間絶へずマナンに向つて通信を爲し、且つ氏は是等の通信を併せて旅行記を出版せしに、非常に世人の稱賛を博し十七世紀の佛國に於て此種の著述中傑作を以て

稱せらるゝに至れり、已にしてローランドの再び佛國に歸るや、直にマナンを見舞ふて久闊を謝し舊情を暖めければ、マナンが氏を見るの様は次第に密にして次第に深く、遂に千七百七十九年の始に於てローランドが婚姻の申込に對し、マナンは喜んで之を諾せんを決せり、則ち誠意に感じ眞情を以て應ぜしものあり。

佛國の習慣として中等以上の婚禮に於ては女子は己れの財産を携へて嫁するを例とせしが、今マナンは何處に向つて之を求めしか、ローランドは學識に富み財産に富む堂々たる一紳士あり、然るにマナンの財産は已に父の蕩盡する所とありて、其身は手より口に飲食するに過ぎず、マナンは殊に對等均一の婚禮を好み、無産にして有財の人に嫁するを厭ふとは有財にして無産の人に嫁するよりも甚しかりし、ざりとて此念慮又斷金の交と同穴の情とを絶つと能はず、千々に心を碎きしも他に爲す道も

あかりしかば則ち自らローランドに面して詳に次第を告げ、他日の誤あからんとを求めしに、ローランドは十万の財産よりも却て此心を愛し我は意を以て婚し財を以て婚するものに非らずとありければ婚姻は略ぼ茲に調ひしもの、如くありし——併しマダ

## 其十二

是をして米國今日の習慣あらしめばマナンとローランドの婚姻は調ひしあり、此の時マナンは齡廿五に達しローランドは四十を越へたり、共に學識経験を有し思想熟せしの時にして固よりかりそめある思ひ立に非らず、假令父母の許可なきも法律は之を是認すべきあり、されど佛國に於ては其習慣として必ず父の承認を経て而して後に非らざれば之が式を全ふすると能はず、依てローランドは自らマナンの父に向ひ事を具して許容を得んとせしに其結果は意外に出でたり、父は之を以てマナンに告

ぐるさへもあさず、一個の考えを以て拒絶したり、義きにマナンに向つて婚姻を勧めたるの父は今之れを妨害せり、父は本心を失へり、一生は已に行き暮れて儘あらぬ憂世を儘にせんとして、却つて益々儘あらぬ境遇に陥り、己れの儘あらぬを憤り移して以てマナンが身の上に加へ、マナンをして又轉た儘あらざるの嘆を爲さしむるに至れり、依てマナンは父と共に家に在るは却て父の爲ならず又身の爲めならずと思ひしかば暫らく他に自活の道を求めんものと決し、先づ心を靜めて婚姻を思ひ止まるべき旨を書して、ローランドに告げ、忍び難きの胸を押へて私に家を立ち去りたり。

マナンは辛に健全の身を有せり、智識あり才能あり、一身を支ふるに於て何かあらんとは思へども、佛國の社會は未だ女子の低度を高むるに至らざりし、マナンをして英國に在らしめば必ず能く一枝の筆を弄して以て

才名赫々の中に自立するを得しあるべし然れども佛國の社會はマナンに向つて二三の弟子に禮法を教へ五六の女子に音樂を學ばしむるに過ぎざりし。而も尙ほ少壯女子の身をもつて社會の風雨に當るの危險を覺へければ、マナンは再び尼寺に向つて身を寄せたり。十餘年前に於てマナンが此寺に入りしの時を顧み、徐に記憶の圖書を開き見れば、轉た人生の敢果あきを悟りしあるべし。時は是れ千七百七十九年の冬ありし。マナンは赤貧洗ふ如くあり、室は恰も燕巢の如く藁を纏として其中に起臥し、一掬の米數個の芋以て珍膳佳肴とあし、時としては之を調理するの鹽さへ欠乏を告ぐることもありし。絶世の佳人も鼻を蒙らば人皆鼻を蔽ふ、貧困の人に友少あり、かどふものは地に落つるの雨脚と戸隙を徹すの風聲あるのみ。されどマナンの精神は眞ありし。時に扞に寄り筆を振つて以て滿面の銀世界を賞し、或は堂に上ぼりて眼下にパリスの街衢を望み、萬物の

靈と誇稱する大愚者の通行に向つて哲理を尋ね、或は月を踏んで庭園に閑歩し、孤雁の斜に飛ぶを見て天涯の無邊あるを思ひ、困難の中に在つて快樂を覺へたり。

ローランドは此事を知れり。マナンが己の爲に家を脱して尼寺に入りしとを知れり。氏は何が故に速に來りてマナンに會し、之を慰藉して以て其目的を達するの道を講せざりしか。個はマナンの意に非ずして、又氏の意に非らざりしあり。二者は靜に時を待てり。後數月ローランドはマナンの父故障を爲さざるの時を待ち、公然マナンを尼寺に訪ふて再び婚姻の事を談じ、終に偕老同穴の契を全ふするに至れり。夫れ潔士の身一度穢るれば、再び之れを如何ともすべからず。白地の墨は消へやらじ。世の婚禮を爲すものマナンとローランドの如くにせば、庶幾くは其神聖を失はざるべきあり。

## 其十三

斯くてマナンはローランド夫人とありしがマナンとローランドとの性質は大に異れり、ローランドは着實温厚にしてマナンは雄壯活潑あり、夫妻其性を轉倒せり、加ふるに夫は妻に比して殆ど二十歳の高齢あれば人或は能く其終を全ふすべきやを疑へり、然れどもマナンは誠意を以てローランドを補助せり、而して後者も又一も前者の信用を失ふ如きの舉動あかりしかば、茲に一對の好夫婦好親友と爲り、共に志を同ふして事に從へり、彼れ等の婚姻後はアミーンと稱する處に居宅を構へ、一机に對して同一の書を読み或は夫の言ふ所に從つて妻之を書し、或は改竄し或は校正し、著書等を爲せしかば、遂に一の習慣とありて後日ローランドはマナンの補助を得ざれば何事も爲す能はざるに至れり、マナンは千七百八十一年に於て一女を擧げユードラと名づけたり、當時佛國にては嬰兒を乳

母に托して養育するを常とせしがマナンは深く之を以て惡習慣と爲し、子を養育するは母たるもの、義務あるを思ひ、唯一の快樂たる讀書を擲つて之れに従事せり。

英國は當時佛國政事社會の模範と爲り佛國の志士にして其志を得ざるもの、或は自由權利の爲に刑辟に觸れんとするものは皆逃れて英國に到り以て私かに佛國の氣運を守れり、先にはブレッツァー、リンゲの徒バスマチールの危難を避けて足を英國に留め、一千七百七十四年に於ては一黨派の魁首たりしマラー、茲に來つて束縛の鎖と題する一書を著し佛國の形勢を舉げて英人の注意を喚起せり、さてマナンは幼時に於て、デ、ロームの英國憲法史を讀み心に益する所あり、且つ當時に至り佛國の政事家は益々其心を英國に向つて傾くるに至りければ、一度自ら彼の國に渡りて視察する所あらんと期し、ローランドを勸めて千七百八十四年七月共に英

國に遊べり。彼等はドーバーに上陸し馬車に乗つてロンドンに向ひしが、山川の風光牧野の景色自ら佛國に異なる所あり、中に於て尤も不思議の感想を與へしものは、村々に番人あり夜に入れば提灯を取り混棒を携へ撃柝以て村内を巡行す、其人を問へば巡査に非らず憲兵に非らず唯村人の交番之に従事するものありし。蓋し英國は已に世界政事上の先導たりしとは云ふものゝ内治未だ整頓せず盜賊所々に出沒し行人を脅すこと多かりしかば、村人自ら立つて之が警戒を爲せしあり。此事はマナンが胸には却て英國を慕ふの念を増さしめたり。マナンハ壓制政府の下に踟躕し、國民の生命財産を保護せんかために衣食するの警吏は、却つて國民の生命財産を蹂躪するを見たり。佛國人民は警吏を恐るゝと盜賊を見るより甚しかりし。マナンは今英國の風を見て喜び以て極樂自由の天地とありせり。マナンがロンドンに至り國會議事を傍聽せしときは、恰も彼の絶

世の政事家ヒットとフホックスが懸河の如く噴火の如き雄辨を振ひ、東洋印度會社の件に對して雌雄を闘はずの時ありしかば、マナンは連日の間之を謹聽し歸途ローランドに告て曰く我は英語に於て通曉せざる所多しされど二氏の雄辨は我が聾耳をして一時聰明あらしめたりと。

## 其十四

ローランド夫妻は英國より歸つて後又スウイツルランドに遊び茲に多少の歳月を經過せしが、其本國に歸るや間も亦く佛國の天地は異常の現象を呈せり。天變か地異か重も苦しき空氣は何となく人の呼吸を壓迫して次第に甚しく眩暈頭痛を加へて血液の順還其宜しきを失ひ、忽ち急に忽ち緩に冷て水の如く熱して火に似たり。斯の如きもの萬心一轍、雨之に加はらば河漲り海湧き横流潰出全國を氾濫して再びノワの洪水も來るあるべく、火之に加はらば四方各地の硝藥に點じて轟々焰々楚人の一炬

とありて全國を焦土に化するあるべく、人心恟々穿縮は泣き嬰兒は叫び老夫は嘆じ壯夫は立ち天將に落るに非れば地茲に裂んとするばかりあり。蓋し佛國が此現象を呈するに至りしものは決して偶然に非ざるあり。彼のパスチールの獄屋は久しく幾多の志士仁人を生埋めにする地獄ありし、潔白清淨の身を以て茲に入る者は再び出づる能はず其様は彼の僧侶が愚民を警戒畏服せしむる爲に唱道したる針の山、血の海も嘗ならず、マンデが萬解の怨を晴さんが爲に畫き出したるヘルの有様も又之には及び難かり。抑もパスチール、怨の記念碑は幾許無辜の血を吸ひ幾許無實の骨を噛みたるやを知らず、遠くは封建の時代群雄割據殺罰は主領の意の存する所、人生は鴻毛より輕きの時より時と共に其の怨を重ね王權統一の時代に至つて愈いよ其の度を増し彼の有名あるルーイス十四世が——朕は則ち佛國あり——朕の意は則ち神聖なりとのことを公然衆民

に告示するに至り、其の暴虐至らざるところなく妊婦の腹を裂かざりしかども料理人が三分間魚の料理を後れしが爲に切腹を命ぜらるゝものあり、斯くの如きものは單に宮殿内のみならず、上の好む所下之より甚しきものあり。賦税の重きとは正直ある田夫市人が満身の汗を注ぐも之を荷ふに由なく、税吏の督促は歳末の債鬼よりも甚しく従はざれば則ち首を刎ねて意とせず、人之が苦痛を免れんが爲に彼等の來たるに先だち自ら路傍の樹下に縊るもの相臨む程ありし。文明太平の世尙ほ人生の果して生存すべき價值あるや否やを疑ふものあり、世亂れて生を了すると能はず貧極つて且税吏の鞭撻を免れず、死するは生るよりも得策といふべきか、此中に歳月を経過し來りルーイス十五世に至て天は愈よ高く地は愈よ低く平等均一の權利を把持すてふ人類は次第に階級を異にして別物とあり、人民の王家に對するは禽獸よりも尙劣等の地を占むるに至

れり。デボンパドリア夫人はルイヌ十五世を助けて暴虐を肆にせしの人あり、大臣大將を延見するの時に當つても其様は犬豕に接するに異あらず、自ら五六の侍女をして頭髮を梳らしめ、席を隔て、言を聴き、而して民衆に對しては猛虎とあり、強狼とあり、羊群を蹂躪するの大臣大將は夫人の意をのみ是れ伺ひ、自ら狗兒を學んで其の氣を損せざらんことを勉む。嗚呼世界の運命よりして考ふれば、長さも又甚だ短きの百年前に於て歐洲文明の中心と稱する佛國の形勢は斯の如くありし、此間に於て今日の文明を養成し來りたるものは果して何人の力によるか。

## 其十五

佛國革命の主因を爲せしもの三人ホルテリア、デヴァラー、并にルイヌ一是あり、此言を守つて而して實行せしもの三人ミラボー、ロベスピエール、并にマナン、ローランドあり。十七世紀に於て異様ある而も必要あるホルテリ

アが哲學上の見識は高くして且つ深かり、氏は佛國の時弊を洞見せり、否世界開闢以來の習弊を洞見せり、則ち政府と教會と其力を混同して一般人民に對すると是あり、時はまだ道理の勢甚だ微弱にして人事は皆力と情とに依つて支配せらるゝの時あり、而して政府は力により、教會は情に因り相結托して情の動かざる所は力之を助け、力の及ばざる所は情之を助けて、以て自他の便を謀れり、故を以て政府と教會との勢力は愈よ盛にして一般人民は其の下に屈伏し、政府の壓制を受け、教會の束縛を蒙り、唯命是れ從ふの風習を養成し來りしあり、ホルテリアは全力を舉げて此點に向け、世上に對して政府と教會を分離せしめんとを唱道し、併せて自ら立ち自ら頼むの氣象を發揮せしかば、茲に從來魔匪劑の中に睡眠し居たる人民を提起して己れの己れたることを知らしめたり、デヴァラーは一鍛工あり、水火を以て百鍊の鉄を鍛ふると同時に苦艱と不平とを鍛ひて己の

思想を養成せり。其説ホルテアに似て而して非あるものあり。人よろしく道理の命ずる所に従つて妄想を脱却せざるべからず。天國を望むの心を轉じて現在を改造するを務めざるべからず。斯くの如くしてゾラは神を信ずるとを爲さず。社會を拜めり。退守を無上の敵として進歩を唯一の友とせり。則ち貧富の懸隔を防ぎ社會をして同一の幸福快樂を分たしめんとを希圖せしものあり。フランスの子にして而してフランスの父たるルーソーは筆頭能く人心を吸引するの磁石力を有せり。佛國人は始は氏を目してゼテバの變人街道の無宿者と爲せり。後には氏を以て泰斗と仰ぎ。知る者知らざる者間接に直接に其心を感化されたり。氏は貧民の困難を見ると死を見るよりも甚しく。氏が天性哲學上の腦髓も之が爲に政事の上に吸収せられたり。氏の説は朕は則ち佛國ありとの妄言を微塵に碎きたり。曰く邦家は個人の衆合躰にして個人の自由權利を容る

、所あり。故に個人は平等均一あらざるべからず。是れ人生の自然にして何人も妨ぐるを得ず。何物も壓するを得ず。之を守護せんが爲に始めて政府を組織せるあり。政府にして此職を誤らば個人は之を變更するの權利あるあり。又曰く人の權利は自然にして決して勢力を以て動かすべきものに非ず。力の存する所則ち權利の存する所といふは誤用を見て性質を誤りたるもの、言あり。優勝劣敗は必ずしも定理に非らず。何と云れば今日の優勝劣敗は決して他日の優勝劣敗にあらざればあり。人生勉めて正義を明にすべし。便宜の主義を取らしむべからず。又曰く邦家は個人に對し自然の約束を以て諸物の所有主たり。則ち邦家は個人權利の基礎あり。故に人此權利を分ち土地を所有せんには先づ其土地の他人の所有に非るとを明にし。次に其土地の其人に向つて必要あるとを證し。而して其次に決して不必要あるもの迄を貪るの意なく。確に勞力を以て之を耕作し



得べきの實を擧げざるべからずと。氏は此理由を以て佛國の實際に照し彼の王公僧徒等が故なくして土地財産を專有し、民衆を飢餓に委して顧みざるものは大逆無道人事に背き天理に戻るものあるとを指示せり。

## 其十六

佛國革命前に於て一髮の命脈を千鈞の重に繋ぎしものはターガー、チツカーの二人あり。ターガーの朝に起つや人々望を屬して此人に依つて以て一國の財政を回復し諸事を整頓するを得べしと思ひしか、大厦の將に覆らんとする一木の能く支ふる所に非らず。氏の政略は一方に於ては或る黨派の傷く反對する所とあり、一方に於ては女后アンテオチテの嬖人を任用せざるの故を以て詰責する所とあり、遂に其職を免ぜらるゝに至れり。マナンは之を聽いて友人に告げて曰くターガーが財政上の政策は我が一身に向て害を與へしと多し、されど我は此人の善にして且つ能き

るを知れり、此人にして朝を去る佛國の爲に惜むべきありと。又ホルテアは叫んで曰くターガーの被免は余が望を被免せり、余は地上に擲げ出されたるの思あり、佛國の長夜は將に明けあんとして又暮れたり、前途唯死あらんのみと。

チツカーはターガーの後を續ぎて朝に立ちしが最早や術を施すべき餘地を存せざりし。佛國をして此地位に陥らしめたる貴族等も今は互に額を集めて議する所ありしが、脆弱柔軟の腦髓豈に此際に當つて一策を盡するを得んや、止を得ず國民の力に依らんと決し、千六百十四年以來殆ど二百年の間曾て開きしとあきの國會に托して之が救濟策を講ぜしめんとせり。夫れ國民は果して之れを爲すの義務あるか、王公は佛國人民の膏血を吸ひ盡して不治の病を起さしめ、今や其治療を以て却て人民に委せん、人民は之を爲し之を治療して其回復するを待ち、再び此王公の

腹を肥さんと欲するか、否々其手は喰はざりし。國民は代議士を撰舉せり、されど王公の爲にするにあらず、邦家の爲にせり、邦家の爲にせんとすれば勢ひ王公に反對せざるべからず、何とあれば氷炭器を同ふすると能はざればあり、千七百八十八年より同九年に渡りて佛國の空合は冬尙ほ蒸し暑かりし、雨あらんとして雨あらず、風あらんとして風あらず、持つが如くにして危く、危きが如くにして持ち、今か今かと待つひまの空恐ろしき心には日は月に月は歳の思を爲せり、王公貴族も心に於て已に最後の近きを知りしあるべし、威權赫々蝶を捕へて鬼の首の如くに思ひ、病者を殺して無上の功と考へ、朕は則ち佛國ありと誇稱せし王威も今は全く氷解し去て魔術師の術を失ひしときにさも似たり。一千八百八十九年七月十四日に於て政府は邦家の不穩を守らしめんと、の意を以て連隊を指揮せしに、彼等は鋒を倒にして進めり、叫べり——我々は佛國邦家の軍兵ありと

りと

## 其十七

王公貴族等の眼は眩せり、油を以て火を救はんとの愚舉に出で、彼の輿望あるチツカーを被免するに至りければ、百万無数の人心は沸騰して羽檄飛んで流言涌き、壯語耳を打つて激狀眼をかすむるばかり、電光石火の速力を以て全國に打ち渡り——起てよ起て、進めよ進め、バスター、バスター——の聲は相和して遠雷の轟くに異ならず、千門萬戸、人皆外に出で、相圖の來るを待ち、老父は涙を揮ふて兒孫を勵まして曰く、汝の祖先は已に誤れり、汝は汝の子孫をして此誤を分たしむべからず、死せよ男兒の如くに死せ、暴虐無道の怨を晴らすべきの時は今あるぞ、他人の氣息を伺ふと勿れ、他人の力を頼むと勿れ、汝は汝の手を以て動き、汝の足を以て進めよ、今日は唯爲すあるのみ、然らざれば死あらんのみと、斯の如くにして

四方八方より怒濤の如く暴風の如き勢を以て、パスナールに押し寄せしかば、時の將軍ビーセンバルも無敵の軍兵と共に手を空ふして口を黙せり——此日早朝ビーセンバルは穩かあらぬ夢を破りて眠を覺ませし折一人あり告げて曰く今日の事は天威の然らしむる所にして人意の向ふ所あり、之に抗するも益あけん、無益に血を流すものは必ず其責を受くべしと言ひ終つて去れり其何人ありしやを知らず——否之を知りしあるべしと雖もビーセンバルは黙せり、此言に従へり故を以て際涯なく漲り渡りたる人波は一物の路を遮るものなくパスナールに達せり  
 此時に於て此獄を守りしものは、ローチーあり、茲にローチーは前夜よりして閉ぢ籠り時の不穩を身の上に荷ひ來りて種々の考案に暮れ居たりしが、今王軍あらぬ佛軍はローチーを外に招けり、之を明け渡さしめんとせり、然れどもローチーは王家の命を守つて動かず、百餘の手兵を以て

數層の外廓を隔て九尺厚きの壁に據り、彈藥銃丸を備へて待てり、然し營中には唯一日の糧あるのみ、全都は則ち佛人を以て満たせり、營兵も又多くは佛人あり、嗚呼ローチー汝は今此佛國の——精神——に向つて何を爲さんと欲するか、見よ見よ高に上ぼりて汝の周圍を見よ、眼の達する所盡く人あり、此盡くの人は唯一心を以て此獄を自由にせんと欲するものあり、時に從へ、處を悟れ、ローチーよ。

然れどもローチーは躊躇せり、寧ろ王家に向つて左袒せり、佛軍の進まんとするに先つて掛橋を引き上げ門を鎖ざし士卒に命じて發砲せしめたり、斯くして一丸萬虎を怒らせり、佛軍は之に應じて發砲せり、小銃大砲數千百、塵も起たせず石も碎けの勢を以て撃てり、佛人の勇氣は茲に現はれたり、自由の子、自由の友、突賊の聲は砲聲を壓し、劍を握るの力は、大空を斬れり、精神か、身軀か、心か、情か、意を待たずして神經動き、神經を待たずして

動作を爲せり。彼等の敵はあらざりし。然れども彼等は、大敵に對せり。パスナールは深く構へは、高き大敵に對せり。已にして、數士身を挺して、溝を越へ、彈丸雨飛の中に立ち、鎖を絶つて、掛け橋を落さんとし、或は跳つて屋上に上ぼり、或は伏して、門關を噛み、同胞無辜の幽囚を助くるの念慮は、實に瞬時を争へり——落とせ、撃てよく、そこじやく——の聲は、力に應じて、其働を助けん、見る間に、百丈の掛橋は落ちて、其音は、喝采の響と共に、天地を震動せしめたり。實に、彼等の働きは、勇ましかりし、併し、待て、個は、唯、外廓のみ、イヤー進め——

## 其十八

パスナールの獄は、ルー、セント、アントー、インと稱する處の一隅を占め、外廓を入れれば、掛橋を通じて、一大門あり、佛人は、今茲迄、攻め寄せしあり、門を入れれば、又一の掛橋あり、之を渡れば、一小橋あり、て圍むに、堅固ある壘壁を

以てし、内は、則ち、八棟の獄屋あり、石階土窟にして、茲に、幾多愛國の精神を幽囚せるあり、其他、官宅、兵營等、二三棟あり、古きは、四百餘年新しきも、二十餘年前の建築に掛るものにて、頗る堅固あるものあるが、今や、佛國王家の命運と共に、其最後に迫れり、事已に急あり、常理を以て論ずべからず、人已に狂せり、狂せよ、狂せよ、狂すべき時に、狂する又人あり、進めよ、奮へ、今一息——今は、是れ、千歳の變事史上の活劇、世界唯一の大觀あり。パリスの都は、熱帶極暑の處とされり、人身皆熱せり、人心み、燃へたり、胸中何ぞ、思考を要せん、結果は、唯、上帝の知るのみ、來れり、來れり、新兵來れり、鍛工隊は、鉄槌を振へり、酒樽を擔ふの手は、大砲を運べり、後に、續くは、軍隊あり、眞の軍隊あり、今や、勢を揃へて、一同に、壘壁目掛けて、砲撃し、黒烟漲ざりて、天を蓋ひ、砲丸地に落ちて、河原の石を爲す、されど、壘壁は、依然たり、依然として、高く、依然として、堅かりし、營兵は、壘中に、座して、壘壁を頼み、時に、立つて、丸を放

てり、必ず人を倒せり何とあれば周囲は盡く人山を爲せばあり、人倒れて人代れり、何人も意とするものあかりし。

火事よ、火事よ、火事見る間に火の手は四方に散せり、喝采の聲は大風を吹き起し、非常の勢を以て火を扇げり、焼くべきものは盡く焼かしめよ、木製の築造は喜んで火を宿せり——見よく——飛び出でたり一人の處女——美人黒烟を突き來りて彼處に倒れたり、焼け焼けデ、ローチーの娘其儘に焼け——然り然らず何に——一人の老壯士飛ぶが如くに突き進んで處女を救ひ飛ぶより早く立ち歸れり、火も亦愛國者あり佛國の爲に暴れたり、此の日の觀を裝へり、焼くべきものは盡く焼き盡したり——マフエットの烟、パベルの滅裂も之れには過ぎじ、世界の最後も斯くやあるらん。

血は流れり、狂人の自由を妨ぐるものなきは此時あり、負傷者は近隣の家

に運べり、死者は目を開き其儘仰いで壘壁の類るゝを待てり、併し壘壁は尙も動かず——動かぬ、動かせ、倒れぬ、倒せ、又も勢援加れり、彼等は外廓の土手に登り鼓を打ち旗を振り以て廓内に臨めり、デ、ローチーは之を聞けり、然れども聴くと能はず、之を見たり然れども信ずると能はず、實に其感覺を失へり——如何せん、如何せん——水を呼べ、水を注ぎ銃砲は焼けたり、手を觸る能はず、然れども寸時も之を用ぬざるを得ず——水が無い、水が届かぬ——油をもて油をもて——よし、よし——よからず外よりの砲撃は止まざりし、外も死を決せり、内も死を決せり。

常にパリスの全都に響き渡るパスチールの大時計も、今まは傍に在つて其音を聽くを得ざりし、何時か何時、長きか短か、人之を知らず數百年間の歴史は激時の中に盡きあんとす、漸く夕刻に近づけり、先頃より獄中の囚徒は地震と驚き、天雷と夢み頻りに聲を擧げて救を求むれども一人の

獄丁之に應ずるものあかりし。

## 其十九

テ、ローチーは此大敵に對せしかども、此の時に至るまで必ず援兵の來るべきを信ぜり。將軍ビーゼンバルは王命を奉じて以て是等の敵を打ち破り獄屋を全ふして共に其功を分つべきとを期せり。ビーゼンバルは之を知れり然れども傍看せり、援軍は來れり然れども皆敵に與みせり、ローチーは何を爲さんと欲せしか——爲すべきの道あるを、萬一を望めり、されど今は心を決せり、燭を執て火藥倉の傍に立ち動かざると羅馬の議官の如く、又金佛の姿に似たり時に眼を閉ぢたり時に眼を開けり、殊勝ある哉、ローチーは泰然として王者の命に非らざれば死すとも、茲を離れじと決せり、否燭を以て火藥に投じバスマチールを天外に破裂せしめて其最後を盛にせんとを期せり。

時は移れり事迫れりローチーの心は眞に入れり、ローネーは幾度か燭を火藥に投ぜんとして躊躇せり、身を惜みしが爲に非らず、人を惜しむしあり、ローネー——汝は惜むべきもバスマチールは惜しむ能はず、汝が此志は愛すべきも汝が過去の罪を如何せん、汝の運命はバスマチールと共に盡きたり覺悟せよ。

火の中に、水の中に今は四時間を経過せり、憐むべし守兵は皆疲れ果てたり、立つ能はず動く能はず、氣力失せて体力去れり、彼等は束縛せられたり鎖を以てに非らず、落膽と沮喪とを以て、佛人は此様を見て勇めり、立てり今は無数の壯士泳いで溝を渡り第二の掛橋を落して以て其道を開けり、此時守兵は書を捧げて降を請ひしが已に遅かりし、壯士は之を拒めり、恰も洪流の玆に潰へしが如く押し合ひ、人皆凱を舉げて廓内に侵入せり、守兵等は武器を投じ路に伏して命を待てり、然れども無益ありし、馳せ

入る壯士は殆ど喜を以て狂し、恰も猫の鼠を獲たるが如く、彼等の周圍を飛び廻り、或は頭を擧ち、或は手足を斬り、百年の怨を擧げて、彼等の上に加へたり、已にして壯士は一々、彼等を縛し、尙も進んで内部に入りしに、ロイチーは已に死せり、自殺せり、茲に於て一隊は囚虜を解ひて自由の天地を見せしめ、一隊はロイチー等の首を斬つて之を竿頭に貫き、パリスの街を歩行し、拍手の聲、喝采の音、天地に響き渡り、茲に專制暴虐の時代は十四日の夕日とも、に暮れにける、斯くして囚虜を自由にせり、然れども、佛國は未だ自由あらざるあり、斯くしてバスマールは落ちたり、然れども、革命は唯茲に萌芽を開きしあり、先に政府の命を受けて集りたる代議院は、此舉を承認し、更に此機に乗じて——人民の權利——を規定せんと議せり、則ち政府の基礎を定めんとを圖れり——人は生れて自由平等あり、死に至るまで變らざるべし——主權は邦家を本とし、邦家の爲に用ゆべき

あり——輿論は法律を作り、輿論を代表せる政府は之を執行すべきあり——租稅徵收の權利は全く邦民に屬すべきと——并に言論、集會、宗教の自由等を規定し、八月廿六日を以て之を公布するに至りしが、佛國政海の狀況は未だ全く定らず、遂に風雲の起るを待つものゝ如くありし。

## 其二十

人民の權利は規定せられたり、政府の基礎は確立したり、慄むらくは當時佛國には一人のワシントンあらざりし、ラフヒェットは曾て米國の獨立を助けて、義勇の光榮を放ち、今は陸軍大將の任に在れども、半生の事業は已に去つて、又總理の任に堪へず、變り易き習ひの世の中に於ても、殊にパリスの人心は變り易きあり、一時全國の輿望を擔ふたるチッカーも、數月間に勢力を失ひて、一文半錢の價値なく、自ら其身を社會の表面より追放し去るに至れり、ミラボーは近代のサムソンあり、一度腕を振つて革命の

勢力を扇ぎし人は、女後の甘言を喰つて私に口を蔽ふに至りしかば、一般人民は殆ど向ふ所を失へり。此間全國の動搖は愈よ甚しく貴人公子の驚いて以て國外に走りしものは、徐に復讐の策を講じ、ルイヌ十六世は憲法に向つて公然頭を屈したれども實は外國に力を請ふて再び人民を奴隸にせんとを期し、而して國內一般の有様は商業行はれず工業起らず、諸事以前に比して却て甚しきを加へ、飢に狂ひ寒に叫ぶもの愈よ多きに至りければ、天下の事物は殆ど歸着する所を知らざりし。

此際人々の耳聾し眼眩するの中に於て能く其心を静め、曾て己れが學び得たる哲理に照し仔細に之を研究せしものは、則ちマナン、ローランドあり謂へらく百年積重の禍害は一朝の能く除き得べき所に非らず、佛國腐敗の氣を一掃せんと欲せば一火の能く焼き盡し得べきに非らず、來れ内亂——我れ汝をして其功を奏せしめんと。

天下の人心首鼠兩端を持するの時に於て一大問題の速決せざるべからざるものは國王をして議會の議決を批拒するの權を握らしむべきや否やの點にあり、一派の人は此機に乗じて以て王家の權利を奪ひ共和政府を建てんとの深意よりして動き、一派の人は國內の有様を見依るべきの人なきを以て從來の如く王家をして主權を握るの處と爲さんと欲し、甲論乙駁衆議沸騰議會の内外を震動せり、其の形勢已に斯くの如し王家又た望を繋ぐ所なきに非らず、女后アンテオチテは盛宴を張り軍人を饗應して厚意を示し漸く勢力を養成するに至りたり、然るに又一方に於ては各地に義勇隊の組織を見、パリヌにては各區より委員を派して一百二十の集合躰を作り、以て邦家の命運を守らしめしが、此集合躰は後に至つて其數を増加し——三百の顧問院——として世に知られ、革命場裡に馳驅奔走せるものは、則ち此徒あり。



夫れ斯くの如き有様あるを以て佛國人民は其心を移せり、邦家の主權定らざれば自由の制度も敷くに處なく却て國民をして自由の誤用を見せしめたり、數千の貧民は隊を組んで市内を横行し、故なくして取り理なくして奪ひ、或は騷擾を醸して之を制する能はざるの有様に立ち至りければ、人々は次第に王家の爲に心を固めたり、暴虐壓制の國王も之れなきには勝れりと思へり、彼等はいまだ自由政體の美を知らざるあり、是を以て従來自ら卒先して共和主義を唱へし、の徒も少しく躊躇の形跡を見はし、國王を戴くも無念ありさりとて他に人心を收攬するに足るべきものはなし、佛國志士の心は今や麻亂せり、マナンは書を裁して友人に與へて曰く、目今天下の形勢は實に容易あらざるあり、此の時に當りて邦事に心を用ゐざるものは邦家の罪人ありと。

## 其廿一

命運の娘マナンローランドの身は今や佛國革命と共に絶つべからざるの赤繩を結べり、千七百九十年三月卅日紅暎東に踊て四海爲に笑ひ、其須臾にして再び暴風暴雨の來るべきを知らず、無數の愛國者は新鮮清爽の氣に乗じてリオンの市内に群れり、則ち——自由の紀念碑——を開くが爲あり、三色の國旗は風に翻りて自由に呼吸するもの、如く、婦人女子は流行の衣服を纏ふて花卉を手にし、一同共に吟詠して此日の盛觀を添へしが、此中に於て獨り他の婦女子に異あり、單一の裝飾を爲して思を遠きに注ぎ、容貌恰もグリーキの神女の如く、温順にして而かも斷乎たる色を帯び、徐に歩を進めて清秀敬すべきの一男子と共に談じ共に語るもの、則ちローランド夫妻あり、此時革命は未だマナンを知らざりし、然れどもマナンは已に革命を知れり、自由の紀念碑に對して微語て曰く、爾の身は今佛國に生れたり、然れども爾の獨立獨行を得るまでは尙ほ多少の歲月

と困難を要すべきありと。  
 是れよりしてマナンは筆を執つて天下の事務を論じ、匿名を以て新聞雜誌等に投ぜしに、常に記者の喜び撰ぶ所とあり、一時洛陽の紙價を動かし、全國の人心を奮勵せしめたりしが、忽ちにしてマナンの身は佛國先覺者の中流とあるに至れり。マナンの家は固より質素を主とせしを以つて、廣壯と稱すべきに非らざりしかども、好んで人々の集會する處とあり、一週四回此を本據として少數の人——多數の人を左右するに足るの人々相會し以て事務を談ぜり。マナンは常に長机の一隅に在つて議長の職を兼あがら、針仕事に従事し、或は書信等を認むるを常とせしが、時間中は謹で彼等の説を非難するを爲さざりし。時には六尺男子の議論往々漠然に失し空しく時間を消費して歸着する所を知らざるに終るとあり、マナンをして隔靴搔痒の感を爲さしめ、數々自ら進んで辯解を與んとしたると

ありしが、常に唇を嚙んで以て黙せり。是れ蓋し社交上の得所にして多數の人をして己れの親友たらしめんと欲せば斯くせざるを得ざるものあり。マナンは一時に於て二事に心をを用いたれども、外より見れば一事に専心するが如く、間斷なく手を針仕事に動かすの時も、彼等の話す所を一々記憶して其人を爲りを判し、其説の可否を知れり。英雄の心力自ら常人に倍する所あるにや。彼のシーザーの如きマナンの如き以て此所を見るべきあり。

マナンの家に會するもの、中にて尤も著名あるものはブレッサー、ピエリ、ジョン、ロベスピエール等あり、ブレッサーは將來ギランデン黨の巨魁としてマナンと其終を同ふするものあるが、永く英米の諸國に遊そび政跡法度の上に於て得る所あり、且フルーッシーを尊信して彼の説を實行せんとを期し、其性少しく輕躁の所なきに非らざりしかども、又是れ一個の實務

家たるに耻ぢず。ピリヨンは其顔其心を表はして正直を示し、鼻高く色白く久しくパリスの市長として人望ありし人あるが、後には天下を身の措き所として、未來の公益を希望する者あり。之と共に手を連ねて來り手を連ねて去りしものは則ちロベスピエールにして、長髮綠衣言少ふして酒を傾くると頻りに、人の言を聽いて時々冬の日の笑を催ふし深く思ひ深く考へたり。

## 其廿二

王家を背負ふて佛國共和黨の攻撃に當り大手を擴げて多數の人を叱咤せしミラポールは此年四月に於て此世を去れり。同六月に至りルイイス十六世はミラポールの遺言に従ひ竊にチユーラリーの宮殿を脱して、東北の國境を指し將に安全の地に達せんとせしが、同地方郵便局長の發覺する所となり、パリスに送還するに至れり。ルイイスも此時に於ては昔日の

ルイイスに非らざりし、沿道の人民其會て制止の聲の下に首を屈し、仰ぎ見るだに憚り恐れしもの今は佇立して一行に對し、みま憤怨の眼光を放ちてルイイスの胸を射たり。斯くの如き有様あるを以てルイイスは已に佛國の國王に非らず、パリスの籠の鳥あり、志士相叫んで曰くルイイスの此舉は憲法に對し邦家に對し神聖なる誓詞を破りしものあり、よろしく之を癡黷せざるべからずと。

抑も佛人がルイイスの逃走を押へ還へせしは當時佛國の爲に拙策ありしあり、若し之をして其行く所に任せ内は相團結して一政府を建てしめば、或は後來の慘狀を避くるを得しあるべし。マナンもブレッツサーも此事を思へり。マナンは一書を知人バンカルに與へて曰くルイイスは去れり吾人にして此機を失はざれば此事や却て吾人の幸福あり。吾人は徐ろに計策を定め目今沸騰せる人心を利用して以て百年の基礎を建てざるべ

からずと。而してルーイスが再びパリスに歸るを聴くや驚いて曰く嗚呼是れ危難を國內に止めて之を養はんとするものあり吾人は勉めて憲法を遵奉し憲法によりて以て此くの如きの王家を廢絶し代ふるに輿望を代表する大統領を以てすべきありと。此希望は實にマナンの希望のみにあらず、當時志士全軀の希望ありし。須臾にして天下の人概ね皆癡騷を唱ふるに至り殊にシャユピソ、ラフに於ては此の議論頗る盛にして直に決行すべしと爲し、七月十三日に於て各地の有志茲に會し此事を議せり。プレッサー、マナンも又此中にありしが、プレッサーは其辯舌懸河の勢を以て滿場の人心を運び去り、王政の到底性命財産を委任するに足らざるを説きて速に共和政府を建てんとを望み、其終に於て揚言して曰く此事や實に佛國の浮沈に關するのみならず、廣く歐洲の榮辱に關する所ありと。此時人皆刀を脱して地に跪き虚空を撃つと三度誓つて曰く——生

きよ自由の爲に——死せよ自由の爲に——マナンは歸途獨語して曰く自由の大陽は將に歐洲の天に上ぼらんとすと。

此集會の結果は次の日曜に於て國民の請願書を議會に呈出するととなり、即ち七月十七日を以て人々は之れに署名せんが爲めにシャンブ、マノの自由の宮殿に集れり。早朝より人々は先を競ふて之を爲し別に異事とてもあらざりしが、十時頃に至つて場所は遽に一變せり、事小ありと雖も事大とあれり——二人のあやしきものあり此中に埋伏し居りしが偶然有志の發見する所とあり其次第を訪ひ、決答を得ざりしかば、有志怒り鞭を擧げて彼等を撃ちしに忽ち一場の騷動とあり二三の血を流すに至りしが、人相傳へて曰く——ラフヒエット死せり、ラフヒエット殺さる——と。

一幅の圖あり、老幼男女數万の人、對して一隊の兵卒あり、正に大砲を連ねて砲撃頻に、黒烟天を蓋ふて地爲に暗く、數百の人、或は傷つき、或は倒れ、叫喚號呼の狀、紙面に溢るゝ所に、一騎あり、綠裝白馬、砲口に迫りて、双手を舉げたり、是れ、あんシャンブ、デ、マーの廢王、請願に署名するの日に於て起りし異變を寫せし圖あり、是れより先き、場中の一揆に——ラフヒエツト殺さる——の報一度傳はるや、恰も警固の兵に向つて、砂石を投ずるものありければ、彼等は、大に驚き、是れ必らず王黨あり、豫め謀つて、事茲に及びしあらんと、直に銃砲を以て、群衆に發砲せり、群衆は固より此意ありしにあらず、身を固むるものは、唯一條のステッキあるのみ、此砲撃に對して如何ともすべきに非らず、驚駭奔騰、以て其身を避くる所あらんとせしに、守兵誤り認めて、進撃し來ると爲し、愈よ砲撃を加へしかば、忽ち茲に數百の人衆を負傷せしむるに至りしあり、斯くの如くにして、自他紛亂同志相撃て

知らざりければ、壯雄血氣の輩は之に乗じて、相鬪争し、砲撃愈よ激烈にして止まる所を知らず、ア、ナ、ヤ、十、万、無、辜、の、民、は、盡、く、殺、戮、せ、ら、れ、ん、ず、有、様、ありしが、ラフヒエツトの此事を聴くや、忽ち馬に鞭ちて、群衆を突き進み、砲口に迫りて叫んで曰く——ラフヒエツト、茲に在り、誤る勿れ——と、守兵は始めて誤聞ありしを知り、人衆も又其錯誤あるを悟り、死傷者を介抱して、各々家に歸るに至りしが、シャンブ、デ、マー自由の宮殿は、端なく不祥の血を以て、其壁に血塗るに終れり。

斯くして佛國志士の張りつめたる滿腔の望は、空しく水泡に化し、此事は不思議にも意外にも再び王家の基礎を固めて——益には立たずして常に害を爲すてふ——中立の人心をして自由の將來に向て、其顔を背けしむるに至りければ、熱心沸くか如き、マ、ナ、ンの胸には、氷の刃を刺し徹せしが如きの驚きを覺へたり、されど死すとも、屈せぬ女丈夫の決心は、難に退

ふて愈々堅く——女子は等しく男子と共に斷頭臺に上ぼるの權利あり  
 豈に之と共に政事に戮力するの義務あからんや——と社會の表面に突  
 進し、文壇に演壇に筆を秃にし舌を爛し以つて愛國有志の徒を固めんこ  
 とを勉め、當時各地の人々より議會に呈出せし十數通の建白書請願書等  
 はマナンの筆にありしものにて、爲に非常の勢力を將に去らんとするに  
 引き止めたり。

一方に於ては王家の餘焰再び起らんとして時に光り時に消へ恰も暗夜  
 の鬼火に異あらず。一日シヤゴビンクラブに於て志士相會せし折柄突然  
 一隊の王兵あり來つて之を圍繞し以て人々の出入を止めしかば場内  
 の騷擾一方あらず、常には口頭泡を吹くの壯士も今は遽の事に泡を喰ひ  
 男子席より飛んで婦人席に駆け入りマナンの爲めに嘲笑せられ再び驚  
 いて元の席に歸へるもの十數人の多きに及べり。已にして王兵は何事を

も爲さず幽靈の如く去りければ、人々も少しく安堵をし各家に歸へりし  
 が斯かる際にもマナンの胆は常に暖にして最後に會場を出で歸途ロベ  
 スピニアが王兵の物色する所と爲ると聞き之れを救はんとして四方  
 に奔走し、夜半に至つて氏は知人の家に在り安全あることを知りければ  
 家に歸りて寢に就き翌朝早起バザーを訪ひ、説き勸めて王黨クラブに屬  
 せしめ、万一口ベスピニア等の捕はるゝとあらば内に在て之を助けしめ  
 んとを圖れり。

## 其廿四

盤根錯節を處するは空談者流の能く爲し得べき所に非らず、先きには乃  
 公の力能く天下を舉ぐべしとの意氣込を以て揚々出で來りたる國會議  
 員も實際に於て王家の雨に潤ひ民間の風に扇がれ言はんを欲して言ふ  
 能はず爲さんと欲して爲す能はず二年餘の議事一も見るべきものあ

遂に社會に向て——汝の議論は國會議員の議論の如し——といふ一種不決斷是れ極るとの諺を止めて以て解散を告ぐるに至れり。本國の形勢は斯くの如くあるに際し、オーストリア帝プロシア王等は其他の諸國と協議の上佛國人民の舉動を以て秩序を滅し社會を破るとあし、ルイイス十六世を助けて爲すあらんとせしが、ルイイスも亦政海波瀾の中に漂ふて時に或は外國の力に依らんと欲し時に或は憲法を遵奉すべきとを公言し、之が爲め外國の信用を失ひ、内國の激昂を増し、愈々益々志士の憤怨を招くに至れり。已にして千七百九十一年十月一日に於て第二の國會を開くに決せしが、其境遇の困難あるとは前よりも甚しきものあり。魯埃の二軍將に侵入せんとするの聞へありて佛國一の軍備あるあし、全國を徹して戦々競々風聲鶴唳に驚くの時ありければ國民の望を屬する所は唯一の堅固ある議會を得んとするにあるのみ。是を以て人々皆誠意を以て

議員を撰舉し議會を構成するに至りしにぞ以前の首鼠兩端議員は再撰せらるゝもの稀に、従つて議院の性質も一變し因循固息の空氣は一掃して有爲活潑少壯血氣の徒をして其方針を取らしむるに至れり。此議會に於て嶄然頭角を見はし將來の牛耳を取るに至るべき一團躰は則ちヤランデン黨派あり、多くは皆グリーキ、ローマの高尙深遠ある文學に依て養成せられたる人にして實際の經歷に乏しきも自ら一定見を有し、其志す所は等しく共和政府を建て、眞正の自由を得んとするに在り。彼等は之に向つて其心を決せり、之を達せんが爲めには身命を以て犠牲とあし、内敵外寇觸るゝものは馬を斬り、人を斬り、止むを得ざれば社會を顛覆すべきを決せり、思きや此壯士間に在つて常に黒頭巾を被り參謀とあり顧問とあり従來の經驗と學識とを應用して以つて危急の際に千斤の重きを加へしものは一女子マナン、ローランドあらんとは、之に依て佛

國の運命は定まり、佛國は建つも倒るゝも國と共にするの同志を得たり。假令同志の身命は奪ふべきも同志の精神は奪ふ能はず、而して此精神は萬世に渡りて邦家を保護すべきあり。ギランデン黨の巨魁は則ちブレッツァーにして其心の磊々落落たるは清風明月の如し、添ゆるにゴードーの雄膽を以てし依て邦家を守るべくバルグナードの能辯は其言無窮に渡りて人心に印するに足る。此他ヒーション、バザー、エスナード、ローベールの如き、皆一騎當千の壯士あり。佛國の議會は業已に是等の徒を網羅せり、豈に前回の覆轍を蹈むの虞あらんや、茲に同年十二月に於て議會は其基礎を固むるの意より當時貴族の逃れて諸外國に在り以て竊に謀る所あるの徒に向ひ斷乎たる處置を爲し、則ち是等の人にして一ヶ月内に國內に歸り來らざるものは財産所有の權利を失ひ、且つ佛國に對し逆賊の名を負はしむべしと、是れ少しく過酷あるか如しと雖ども此際に於ては又た

必要の處置といふべきあり。

### 其廿五

次にギランデン黨が議會に於て議決せし處は——各地の僧侶は教會より離れて別に人民より金銭を受くるを得ざると——是あり此事や當時其勢力王公を凌ぐてふ僧侶をして頗る憤激せしめたり——何れの國何れの時に於ても外部の改革は一朝にして爲すとを得へしと雖ども、内部の變更は歲月を要せざるを得ず。佛國志士の心は王家と僧侶とが文明進歩の敵あるとを認めて此舉に出でたれども多數の愚民殊に婦人女子は之を以て暴虐非道の所爲と爲し——身は飢餓の鞭撻する所とあり其之を爲せしもの僧侶に原すると少あからざるを知らず、却て之と連結して以て其心の迷をして益々迷はしむるに至れり。上は王公の震怒せるあり下は僧侶と愚民とが聲を大にし勢を張て之に應ずギランデン黨の境遇



又困難ある哉。

斯くの如き時勢あるにも係はらず。フランス等は其意見を進めて普墺等の諸國に對し斷然戰端を開くべきを以てせり。革命のあらし鳥とも稱すべきバルグナードは雄辯を敷して曰く諸君よ開明の思想は浮べり過去數世期歴世暴虐の恐るべき闇黒は尙ほ此中を蓋へり。然れども壓制を變じて自由とあし奴隸を變じて公民と爲すの時は今や來れり。我胸に來れり。思想の存する所は則ち行の從ふ所あり。我々は豈に力を盡し身を盡して以て之を爲さるべけんや。然れども之を爲すや難くして其事や大あり。歐洲諸國にして壓制暴虐を肆にする間は佛國獨り自由の天地を占むべきに非らず。彼の普墺の如きは則ち終始我々の自由を妨害せんとするものあり。故に我々は今自由の十字軍を起し以て之が目的を達せざるべからず。男兒須らく思ふ所を實行すべきあり。此大願や成就せよ。命運

をして我々の名を笑はしむる勿れと。

疾風の勢を以て議會を震動せり。多數の人皆之に應じて以て此舉の雄壯あるを唱へたり。唯獨り政治家の見識を以つて反對せしものは彼のロベスピエールあり。其の說に曰く邦家は先づ内部の愛を去つて而して後外敵に對せざるべからず。之れを問はず徒に干戈を動かすあらば其結果は好んで自滅を執るものたるに過ぎず。余は斷じて開戰說を賛成すると能はずと。フランス等とロベスピエールとの破裂は此時に始れり。フランスは深く信を命運の上に置けり。而して時務に照し見て今日に於ては此急激の手段に依るの外は他に爲すべきあきを思へり。二者其說相合する能はず。茲に危険の上に危険を重ねるに至れり。然れどもフランスの勢は當時旭日登天の如くありし。議會を其意の中に左右せり。忽にしてナポレオンの内閣終を告げしかばフランスは自ら代りて之を組織すべきに

決し各其人を配置したり、ブレッツサーは佛國の主相となりしも赤貧舊に依て洗ふが如し、一建築の六階目に二三の部屋を借り受け、此中に起臥して粗衣粗食細君の手を待つて下着等を裁縫せしむることは恰も裏店住居に異ならず、ブレッツサーの心は邦事を以て満たせり、豈に又家を思ひ衣食を問ふの暇あらんや。

## 其廿六

ブレッツサーは議會より出で、内閣を組織するに決したれども議員を抜て閣員に宛つるを好まず、何とあれば是れ議會に於て自黨の勢力を殺ぐの恐あればあり、則ち此他に於て之を撰ばんと欲しローランドに托するに内務の要職を以てしたり、此の撰は當を得たり、當時佛國に於て理財に長け商事に明にして且つ哲學上の思想を備へたるものローランドの右に出づるものあり、加ふるにマナンの在るあり、能く臨機應變の策に依り

て困難是れ極るの内務を處斷するを得べきあり、千七百九十二年三月廿三日に於てローランドは其職に就き同夜内閣員一同を招きて祝宴を開きしが、マナンは彼等の人と爲りを見、嘆じて曰くブレッツサーも亦不具の内閣を構成せり、新任外務卿デユモレーズは一小人のみ外は才子の如くに於て内は偽を含み到底事を永くすべからず、而して尤も憐むべきは陸軍卿デグレイブあり、性質全く其職に反せり、好く言は、温良悪く言は、怯懦あり、此際に於て此人を以て此職に宛つブレッツサーの過失是れより大なるはあしと、果して此言に違はず後數月を経てデグレイブは職に堪へざるを以て辭職しサルバン代つて陸軍卿とあるに至れり。

ギランデン黨は之に依つて内は僧侶を抑制し外は普墮に當らんとせしが、ルイエス十六世は尙ほ此間に躊躇して決する能はず、荏苒日月を猶豫し批准を與へざりしかば、内閣も議會も再び其の運動を自由にすると能

はざりし。マナンは此事を聴きローランドに説いて曰く此際に於て内閣員たるもの邦家の急を救ふの策を運らす能はずんばよろしく直に職を退くべきありと。又筆を取つて一書を認めローランドに托して内閣に送りルイス十六世に呈せんとを求めしに内閣員は之を賛成したれども罪を恐れて其名を署せず。止むを得ずローランドは己れの署名を以て之をルイスに送呈せり其大意に云ふ邦家危険の際に於て邦民をして歸着する處を知らざらしむるより危険あるはあし。今陛下の舉動を見るに盡く皆邦民の疑惑を惹き起さるはあし。陛下の爲に圖るに心を定めて斷然邦民と方向を同ふし。憲法によつて進退するの實を示さるべからず。邦民が規定せる權利の布告は政事上の福音にして佛國の憲法は決して背くべからざる經典あり。施政者の據る所唯之れあるのみ。人民は之によつて生き之れによつて滅せん。陛下幸に之を思へよ。

此建白の結果は直に内閣員の頭上に墮落せり。第一に免職を蒙りしは陸軍卿サルバンにして、外務卿デユモリーズは心を王家に寄せしを以つて安全ありし。サルバンの免職を蒙るやマナンを訪ふて曰く我が爲に祝せよ。我れは今日免職を蒙れりとマナン曰く果して然るか我は爾が第一に此名譽を得しを羨むあり。願くは我が夫をして之に續かしめよ。言未だ終らざるにローランドは來り告げて曰く余は余の望を達するを得たり。余が免職の聲は議會に於て喝采を以て受け取られたりと。斯くの如くにして免職を蒙るものは民間の尊崇する所とあり。共に王家に向つて反對の意を強ふし而して王家に於ても又徐ろに圖る所あり。曾て米國に在つて自由の光榮を目撃したるラフヒエットの如き今は紛々條緒あきの様にあき果て、王家に左袒するに至りければ、茲に一層の激動を加へ全國を舉げて狂人をして狂人を逐はしむるに至れり。

## 其廿七

埃軍國境を壓して佛國の義勇隊將に之に向はんとするや——危急——  
 存亡——邦家——等の叫は電光の速力を以て後より彼等を襲へり。茲に  
 革命の唱歌は到る處ろに相和して國內に響き渡り、早くも數百の壯士は  
 之に乗じて以てパリヌに進みたり、實に佛國は危急存亡の秋に會せり、強  
 敵國境を蹂躪して我が軍利あらずの聲音に都人士の膽を冷にせしのみ  
 あらず、王家無道の極佛國の中心より起つて外軍に應じ、以て己れの赤子  
 を屠殺せんとを圖るに至れり。王家已に此下心あり外軍勝利の聲と共に  
 暴威を示し先づパリヌ人民の依て以て生を托せる市長ヒーションを罷  
 免し、次でギランデン内閣を黜け去るに至りしかば、必あるものは愈よ心  
 を碎き力あるものは愈よ力を振ふの時とはありぬ。

此時に於て之に對して第一に議會の議決せる所は行政權を差し止め、取  
 り敢へず王族をラキゼンバルグニ移すに在りし、然れども人民は尙一層  
 の速決を以て王族をテンプルの塔内に幽閉し去り、同時に近衛の兵を捕  
 へて盡く獄中に押し込めたり。其之を爲せしものは即ちカンミュン黨の  
 人にして今や非常の勢を以て社會の表面に突出せり。何人が此權利を與  
 へしか何物が是等の人を撰びしか、與へしもの亦く撰びしもの亦く彼等  
 は佛國に主權あきとを知れり、彼等は革命の權利によつて此事を執行せ  
 しあり。此事を執行して何人も咎むるものなく却て衆人の喝采を博せり  
 天下の事は彼等の手中に落ちたり、カンミュン黨の首魁は何人ぞ此人や  
 奇人あり千百他人を虐殺するを見て毫も意とせず唯知人に厚し——一  
 知人が壽命を以て斯日を終るを見るも獻獻女子に等しきものあり、我れ  
 其人の主義を知らず然れども其叫びを聽けり——爲せよ爲せよ速に爲  
 せよ、止むと勿れ止む勿れ——と則ちダントンは巨人あり

一人にあらず無数の人あり、否彼れは無数の人の上に立てり、千万無数の壯士は手とあり、跡とあり、また足とありて彼の意の欲する所に従へり。今や佛國沈滞腐敗の社會を喝破して其表面に見はれたり。見よ其背高きとは雲漢を貫き其跡の大あるとは全都を蓋へり、而して此巨人と共に高踏濶歩して等しく革命場裡に出て來りしものは先きにギランデン黨と其議合はずして一時波瀾の外に立ちたるロベスピエアと、號呼の聲を聴くと唱歌を聴くが如く、虐殺の屍跡を見ると美術を見るが如きの感ある彼のマラーあり。

斯くしてカンミュン黨は將に其爲さんとする所を爲さんとせしが、邦家の輿論は革命場裡に臨むの儀式を舉げんが爲にや、もう一度内閣を組織せしめたり。依てギランデン黨はカンミュン黨と連合内閣を造るに決し、メントンを舉げて司法卿とあし、モンゲを陸軍卿とあし、ローランドは舊

に依つて内務卿とありしが、一時此兩黨を纏縫せしものはマナンの力多きに居るあり。

如何ある政跡を以て佛國の基礎を定むべきやは目下の急務ありし。マナンの畢世の願はプリユターナが想考より造出せし如きの共和政府を建つるとにてありし、然れども一般撰舉は當時佛國に於て行はるべきとにあらず、飢ゆるもの、叫ぶもの、猛げるもの、狂ふもの——此等の徒をして均一平等の投票權を得せしむべきや否、此時に於て之を思ふも無益ありし、外敵は次第に迫れり、内亂は愈よ起れり、佛國は何を以て佛國を防がんとするか。

## 其廿八

千七百九十二年十一月二日は、さあさだに燃え易きのパリス人をして烈風の中に立たしめたり。普軍已にラングウエイ、バルマンの諸洲を陥れし

を聞き幾多の壯士は起つて同胞の敗を償はんとし、行くもの、送るもの、東西相織るが如く、鼓聲は天に響いて士氣を鼓舞すれども、無數の國旗は其影を地上に殘して色あし、行くものは萬死の道に入るあり、止まらるものは將に破裂せんとする火山の上であり、忽ち知る警鐘四方に響いて人耳を劈き砲聲天地に渡りて次第に近く次第に激し、人々驚駭の間に流言百出、其何れより來るを知らず、空天の現象平時に異あり、大震地を裂くに非ざれば、施風山を碎くべきを報ぜり。

果して是れカンミュン黨の爲す所か、マラーが胸間の地獄を實地に書き出せしものか、將たダントンが——我が名を永遠に焼き我が心を無窮に滅せしめよ、唯佛國にして自由あるを得ば——の言を實行せしものか、但し又パリスの浪士が百年の怨を含んで王黨をして異類あからしめんとすの意に出でしものか、佛國革命の歴史家ミナレール、ラマチーン、ガールイル

の如き各其説を異にして其原由を知るによし、あし然れども物自ら定則あり、其志の向ふ所は期せずして相會す、此事や恐くはカンミュン黨の手に始まりしあるべし、されど之に應じて以て之を盛にし之れに乗じて以て其暴を肆にせしものはパリス全都の人にして、固より此の間、教唆先導の任に當りしものあるに非らず、彼等は失望の極、憤怒の餘、知らず知らず此舉を爲し、到るに任せ、觸るゝに任せ、秩序を寸裂し、法制を微塵に附して其思ふ所を逞ふするに至りしあり。

一隊の獄吏あり二十四の獄囚——多數は僧侶——を引率して一獄より他に傳送せんとし、鞭て獄屋の前に達せしに、一群あり之を取り圍みて頻りに叫び頻りに罵れり、已に我に戦を買ふの心あり、相手の一言は直に彈藥を焼くに足り、茲に紛雜の現象を呈せしが、之を相圖に馳せ來る暴徒は數千百、半は襤褸を纏ひ半は裸躰に、飢餓を以て鍛へ、寒烈を以てさらした

る顔色は、恰もインデアンの如く、手にく棍棒を携へ見る間に獄壁を打ち破りて中に飛び込んだり、さては事よと思ふ間も、荒れ廻る暴徒は獄囚——王黨——を引き捕へて外面に擲げ出し、擲げ出し、須臾にして盡く彼等を大廣場へ追ひ込みしが、此時加はる一群の暴徒片端より囚人の首を薙ぎ立て、其様恰も牧童の草を薙るに異あらず、逃るものは場所なく向ふものは斃れ、忽にして滿場修羅の街と化し去りぬ。今や彼等の胸には惻怛の情を失へり、之を爲す演劇を演ずるが如し、一人あり法庭に擬し筆を取つて紙片に對し以て裁判を宣告すると爲し、一同は之を聽て喝采拍手相依つて笑へり、實に此事を詳記せば史家の筆をして爲に折れ、爲に止まらしむ。デランベールの王女は二八の妙齡を以て此獄中にありしが、彼等の虐殺する所とあり、其芳顏沈に塗れし、の首は暴徒の爲にパリスの街頭を引き廻はされ、遂にルーイヌ十六世の目前に擲け棄てられたり。又デサ

ンブリユール嬢は其父の命を助けんが爲に身を以て父を蔽ひしに、五六の暴徒は之に迫りて一杯の血を掬し之を飲まば彼を許すべきを以てす嬢は之を見て絶塞せり、忽ちにして己れに歸り憤然立つて夜刃の如く暴徒の前に突立ちしに、其の勇氣や勝さりけん、最後の念や達しけん、遂に父の命を全ふして歸へりしとある。

### 其 廿 九

暴徒は數日の間狂奔亂行防ぎあきの獄屋に入りて防ぎあきの囚人を捕ひ盡く残酷の手段を以て虐殺し去り、獄を破る者數十、人を殺すと數千、而して此間敢て一の鎮壓を試むるものなし、兵を握るのカンミュン黨は傍看せり、此暴行は那邊に向つて止ままるへくありしか、彼等は殆ど王黨を滅絶して止まず、奇ある哉轉じてギランデン黨の上に及へり、殊にローランドに向つて搜索せり。

九月二日の日曜に於て時將に午後五時に近からんとす、マナンは獨り家に在りしに忽ち二百の暴徒あり高聲に呼ばりつゝ、ローランドに面せんとを求む、マナン。ローランドの不在あるとを告げしかども、暴徒はイツカナ聴かず家宅に侵入せんす勢ありければ、マナンは一人の僕を遣し彼等に説き、其中の十人に向て自ら面會すべきとを以てせり。言に應じて十人の壯夫衣肝に至り袖腕に到り、蓬髮赤足、破帽を手にして室内に入り來りしが、マナンが沈重威あつて猛からざるの風采は此時に於て非常の勢力を有せり。彼等は思はず容を正だし暫し躊躇の後一人口を開ひて曰く、余等は邦家の爲めに將にバルマンに赴きて普軍を扼せんとするものあり、然れども身貧にして武器の供給すべきを乞ふを與へよ、マナン曰く、ローランドは内務卿を其職務に於て、關する所にあらず、爾等武器を得んと欲せば之を陸軍卿に計れと。此時一人腕を扼して曰く、内閣のやつ

らは逆賊あり、ローランドは何處に在る、引き出せ——と罵り合ひ其様容易あらざりしかば、マナンは椅子を離れて立ち上がり——爾等強てローランドを見んと欲せばホテル、デラマリンの内閣會議に行け、茲には他の内閣員も列席すべければ諸事爾等の便を得んと告げしにぞ、彼等は一同退出せしが、マナンは階上に上ぼりて屋外を望むに、恰かも百鬼の夜行に似たり、或は棒鎗を手にし或は短刀を揮ひ、破れ太鼓を打つて狂ひ行く人々は、佛國自由の祖先とは得も思ひよらざりし。

カンミュン黨の首魁ダントンも其事の意外に出でしに驚けり、此日市長ピイジョンを訪ふて曰く、君は彼等の爲す所を見しか、彼等はローランドを捕へんと企て居るに非ずや、ピイジョン曰く、何者が——ダントンか、彼の飢餓の公子よ、ピイジョン——何に彼等が内閣員に向つて——ダントンは是れ此通り——と遞捕狀を示せしに、ピイジョンは讀み終りて——



事茲に至る如何ともすへからず好し彼等をして此事を爲さしめよ彼等を罰せんが爲に必ず好果を得へしダントン——否々好果を得るを要せず余は之を爲さしむるを得ずと。

カンミュン黨の中に於て、當時ダントンはギランデン黨と力を併せて一時の急を維持せんとを勉めたれども、ロベスピエールとマラーとは深くギランデン黨に對して含くむ所あり、ローランドに向つて愚民を指揮せしものは則ち此の二人あり、然れども内閣員も又互に警戒する所あり以て變に備へしかば、革命も茲に一休息を爲し暴徒も一先づ其家に歸りたり。此年九月十一日に於てローランドは其職を辭せんとを決せしがマナンは之を止めて曰く此の時に於て此事を爲さば恐くはギランデンの内閣は瓦解に就くべし佛國の爲に之を思へと。

## 其三十

佛國の志士は實に勉めたり、少間あり豈に爲すを怠たらんや、千七百九十二年九月廿一日に於て共和政體の基礎を建てたり。數月にして諸事稍々整ひ國王の宮殿に洗禮を加へて國民の議場とあし、カンミュン黨ギランデン黨の人此中に在つて天下の方針を定め、曇らぬひまの光榮に晴れ衣を着けし貴女紳士傍聽席に群りて以て其景氣を添にける。時恰も國境に於て普壇の軍に對し佛軍の勝利を報ずるものあり、デューモレーズはパーメイに於て全勝を占め、カスパンはノインスを扼して以てフランスウヰツ公の鋒銳を挫きしかば、人々皆飛揚の心地して共和政府の前途うらゝかありと思きや天は忽ち曇り來てギランデン黨とダンドン、ロベスピエール、マラー等の間に一大罅隙を開けり。元來此二黨の中に於て勢力を有するものはダントンとマナンあり、マナンはダントンを惡めり、何とあれば九月の暴動はカンミュン黨の爲す所にしてダントンは當時此事

に與からざりしと雖も、一方に於ては深くロベスピエール、マラー等と結託し自ら司法の職にありながら暴動者を問ふとを爲さず、是を以てマナンはローランドに説くに嚴密に彼れ等を搜索して相當の刑に處すべきとを以てせり。ローランドは此儀に従ひ一書を裁して曰く、今や新に共和政府を建つるに當り彼の如き暴動者を措て問はざれば佛國は彼等の横行する所とあり、吾人は終始彼等の刃の下に呼吸せざるを得ず、是れ天下をして法おからしめ、無法をして天下に勝たしむるに非ずやと。以て議會に送れり、蓋し此事や當時の形勢に對して大勇者にあらざれば爲すと能はず、何とあれば羊の身を以て虎狼の群に對するに異あらざればあり。天下の識者は稱賛し其義勇の心に感服せり。然れども之を實行するの道は甚だ困難ありし、施政者は兵力の頼むべきなくしてローランドは其職にあらず、加ふるに反對黨の首魁等は腹を探て私に計畫する所あり、要する

にギラン、デューン、カンミュン、黨と力を併せマナンをダントンの心を和するに非らざれば此事を舉行する能ざりしあり。然るにダントンは此議を意とせず人をしてマナンに告げしめて曰く、我國目下の計を爲す三統領を撰ぶを要す。ロベスピエール、セント、ジョスト、コーソン其人あるべしと。マナンは之を聽て之に答へず、否之を以て亂暴を以て佛國を支配せしむるものと爲せり。マナンは當時英人の氣象を尙とべり。故にマナンも其氣象は英人の如くありしあり。代議政府の眞精神、徳義と智畧とを兼而して其爲さんと欲する所は自由の天地に向つて放肆の空氣を絶たしめんとを勉めしあり。此際に於てマナンをしてダントンを相共に一步を譲らしめば、佛國の基礎は山岳より重かりしあるべきに、とは後人の想像する所あれども、マナン等は到底ダントンを等と事を永くする能はざりしあり。マナンは彼等と事を共にするの益なくして却て害多く自説を主張せん

か、彼等は従はざるべく、彼等に従はんか。狂人を學ばざるを得ず、唯天はマナンをして佛國に勝たしめず、永く佛人をしてマントン等の餘流を汲ましむ。是れ佛國政躰の今日に至て長へに花時の風雨と其趣を同ふする所にか。

## 其卅一

マナンの人と爲りは味方とあれば神女の如く敵立ては夜及に似たり。一度マントン等と反對の地に立つや敵愾の念は全黨を壓し憤怒の聲は彼等を攻め事に乘じ機を見て殆ど止む時あり、此時恰も撰舉期に際し兩黨各勢を匯めて以て新に之に臨み必死の力を振ふて競争を爲せしより、議員の一半はギランデン黨より一半はマントン派を撰出するに至れり、然ども市長ヒーシヨンはギランデン黨の側に立ち且つ黨中雄辯秀才の徒多かりしかば全躰の勢に於て尙ギランデン黨の盛あるを見たり、諸此新

議會に於て第一に議決すべき難問題は言はでも知るべき彼の九月暴動者の處分是れあり、此議に向ひギランデン黨の辯士ローペーは單刀直入ロペスピアを指して暴動の張本と爲し激しく攻撃を加へしかど、惜い哉確然たる證據を擧ぐる能はざりし。ロペスピアもさるものあり、之に向つて大に駁撃を爲し暴動の原因と次第を列舉して却て罪をギランデン黨に歸したりしかば、其説は局外者の贊助する所とあり、茲にギランデン黨をして一敗を取らしめたり。

暴徒等は愈よ其勢を逞ふし數々議會を騷擾せしめ、ギランデン黨に向て妨害を興ふると多かりしかば、ギランデン黨は不得止一軍隊をして議會を警衛せしめんとを發議せり、蓋し日の將に落ちんとする時に於ては六合又爲に憂色を添ふ、ギランデン黨は之が爲にますます卑劣と呼ばれ怯懦と叫ばれ殆ど興望を失ふに至れり、此時に至るまでギランデン黨は智

識を頼めり然れ共マントン等は力を養へり、佛國の常備軍は概ね皆彼等の手中に歸せり、今やギランデン黨は道理の無効ある議會に立つて、警衛を得んと欲するも得る能はず、手を束ねて豺狼の牙に向はんとす、又危からずや。

恰も普壤の軍を打ち破り勝を奏したるデューモレーズはパリヌに歸れり、上下の差なく黨派の別なく皆彼を歡迎し、人々は依て以て兩黨の和睦を圖らんとを希圖せり、デューモレーズも又茲に意ありき、則其夜マナンを訪ふて會食し、數多の賓客と共に笑談數刻、隔意なきが如くありしが、言偶ま彼の暴動の事に及ぶや、一場何となくしらけ渡り、デューモレーズも亦發言の機を得ず、且つ其相動かすべからざるを見て止みたり、此後デューモレーズは再びマナンとマントンをじて和解せしめんと圖り、一夜マナンに向つて劇場に同行し、茲にマントンに面會して談笑せしめんとを

求めしかど、マナンは所用に托して之に應ぜず、又或る日マナンはパルグナードと共に劇場に臨みしに、マントン等の共席に在るを知り避けて相見ず、依て全く兩者を和解すべきの機は去れり、否佛國を和解すべきの機は去れり、元來マナンとマントンの罅隙は實に黨派上意見を異にするのみならず、一身上に於いても挾む所あり、曾てローランドが一事を委任せられしときに於て其の繁忙ある身に堪へざりしを以て辭せしに、マントンは嘲弄の意を示して曰く繁忙に堪へざれば夫人に頼めと、此言はローランド夫妻を侮辱せしものあり當時——ローランドは伎倆あるに非らず其妻の命を奉じて事を執るものに過ぎず——との風説ある折柄ありしかば、深くローランドの心を刺衝せしあり、此事や一小事に過ぎずと雖ども反對の側に立つに従つて自他の罅隙を大にし、公事上に連結して解くへからざるに至りしあり。

## 其卅二

マナンの身は今や人目の聚點となり、革命の中核とされり、何人も之を仰ぎ何人も之を知る、味方の羨む所にして敵の目指す所、佛國一般の社會はマナンの一進一退を見て其心を安危せり、マナンの從來ローランドを助けて爲せし所の計畫中頗る世人を驚かすに足るべきものあり、當時パリヌに有名ある一新聞紙はマナンの筆に依つて其光彩を放つものあると次第に社會の知了する所となり、此婦人にして此伎倆あり、千百貔貅の壯士をして後へに睜若たらしめたり、然れどもマナンの此地位を占むるに至りしものは貪名心の爲に驅逐せられしに非らず、唯社會の勢力はマナンを推して茲に至りしなり、則ちマナンは命運の子にして而して革命の母とあるべきものあり。

彼の暴動事件未だ處斷する所あらざるに先ちて茲にルーク十六世の處分を議するの時に際せり、マナンの一生に於て失策とすべきものは此時に起れり、一時の勢に任して事を處斷し敵をして頗る攻撃の便を與へしめたり——一職工ありルークの寵嬖せしものにてローランドと知ると久し、私かにローランドに來りて——宮城に一の鎖函あり、此中に邦家要用の書を收むと告ぐるや、ローランドは直ちに茲に赴き開いて以つて書狀を手にし家に歸りてマナンを共に一々披見し再び己れの封印を際して而して後委員に送れり、委員取りて閱するに此書狀は概ね皆目下處分中あるルークの爲に利益を與るものにて曾て一般の風説に——ルークは暴虐非道奸僧と馴れ能吏を害し且つ歐洲諸國と通じて佛國の憲法を破り佛國の自由を滅絶せんとを圖りし——といふ事實に對して却てルーク十六世は先王に比して恭謙の處あり、邦家の爲に苦慮せし跡を明にせり、然るに反對黨は之を信せず、ローランドが獨り之を開

封し他人は毫も預り知らざりしを以て疑點と爲し、或はローランドが王家の爲に圖らんが爲に不都合ある書翰は取捨し去りしものあらんといふものあるに至り、ゼントンの幕下チャホーは斷然議會に於てローランドの處置を非議し、且つ曰く——我はピアードあるものより一大事を耳にせり、佛國の王黨は英國の王黨と結合して再び佛國に王家を興さんとを圖り、其參謀は則ちローランド夫妻ありと。此事を聽てローランドは、議會に臨み毫も形跡なきの妄言あるとを辨解せしが、事マナンに關するを以てマナンも自ら議會に臨むこととされり。元此の事の妄言たるは何人も知る所にして反對黨と雖ども其本意に於て之を信ずるに非らず、已にローランドの處置を以て不當と爲し又マナンを指す折柄あれば故らに事を誇大にし、甲論乙駁一場の紛議を生ずるに至りしあり、此時マナンは歩を進めて議場に上ぼり來れり。場中の人衆は遽に聲を止めて目を

マナンの上に注げり。ロベスピエアの顔色は春猶冬の如し人をして一目寒慄せしむ、マラーの顔は疫病神の如くゼントンの様は魔王に似たり。ブレツサー、バザー等は一部の席を占めて各座を正だし以てマナンの來るを迎へしが、マナンは事に臨んで躊躇する所あるを案内に連れて悠々演壇に上ぼりしに此時ギランデン黨の喝采は大空に響き渡れり。

### 其卅三

マナンは靜に口を開ひて曰く、チャホー氏の言ふ如くピアードある人先日我が許に訪ひ來れり、我は面識なきの人あるを以て辭したれども、其人の言にはロンドンに於て聽きし一大事あり。即ち佛國の一黨は英國の王黨に通じ王家を再興して歐洲の天地に共和政治の跡を絶たしめんとを圖るとのに我は之を止め果してさるとあらば請ふ之をローランドに告げよと言ひ放ちて別れたり。然し其時我が察する所には其人の舉動

は何となく誠實あらざる所あり——個は何物かの廻はしものにて我が  
 心を探りに來しものあらんと思へり。斯くの如きとは近頃通常の事にて  
 此一人のみに非れば我も又敢て齒牙に掛けず、何人にも告げず、打過ぎし  
 に今此堂々たる議場に於て意外の處より此議の起りしを見れば、さては  
 と思ひ合はすることもあるあり。兎に角王家再興の如きに至ては我が心  
 の夢にだも知らざる所にして、我が二十年間の經歷は我が身の地位を證  
 すべきありと。其言や簡單にして其辯は尋常あり然れども能く事實を明  
 にして且つ反對者本意のある所を指摘せしかば、流石のチャボも再び  
 口を開くと能はず。滿場喝采の聲と共に彼の説は消滅し去りたり——彼  
 の説は消滅し去りたり、然し彼の心は益々マナンを惡むの念を増さしめ  
 たり。

議會は引續ひてルーイス十六世の處分を議せしが實に非常の歴史中の  
 非常の議事ありし、議會は兩黨の別なくルーイスが罪あるとを認めたり  
 唯論點の別るゝ所は之を死刑に處すべきか將た退放し去るべきかの二  
 點にして、ダントン派の人は一様に甲を主張し、ブレッツァー派の多數は乙  
 を取れり其説の進む所其論いよく激に涉り、甲は乙を目して王黨とあ  
 し、王家再造に意あるものと爲せり。されどギランデン黨殊にブレッツァー、  
 マナン等は徹頭徹尾共和黨の人あり、アリストントン、ブリユタス等の共  
 和主義によつて教育せられ、プリユターチ、ルーソー等の説を實行せんと  
 を務め、而も實際の運動に於て佛國共和政府の先鞭を着けしの人あり。唯  
 ギランデン黨は人情を重ぜり、ブレッツァーが内閣を組織して第一に舉行  
 せしはセーミンダミンゴの奴隸を廢するに於て、事不幸にして好果を得ざ  
 りしと云へども、人の自由を重んじ浮榮者を惡むと同時に、不幸者を憐む  
 の情甚だ切あり。今やルーイス十六世は王者に非らず、佛國は共和政府に

依て萬事を處断し人民も之れに依つて自由を希圖するあり。故にブレッツ  
 カーは此議に對して曰く國王たるルースは已に去れり、佛國の社會は  
 共和政治を樂めり。此時に當りて故らに囚虜たるルースを首斬臺に押  
 し上げ、以て殘酷ある處分を爲すは、是れ却て王者の餘光を佛國に止どめ  
 しむるに非ずや、如かず之を國外に放謫し去らんにはと。議會の多數は之  
 を聽かず。ロベスピエール、マラー等は曰くルースは佛國の爲には不俱戴  
 天の敵あり。ルースは已に死灰あり、然れども再燃の虞なき能はず、何と  
 あれば天下之を煽ぐの人多きを以てあり、打ち盡すべきものは盡く打ち  
 盡さしめよ、決して遺類あらしむべからずと。議場外に群集せる暴民等は  
 相叫んで曰くロベスピエールの説可あり。マラーの論是あり、注意せよ。王黨  
 は議會の中にあり、狼虎の心を以て羊の皮を裝ひ、虚に乗じて佛國の自由  
 を蹂躪せんとするものありと。

## 其卅四

曾て手以てセーチの水流を溯らしめ、目以てミュードンの飛鳥を落し、足  
 以て一天萬乗の位を踏みしの人、今は人生無上の羞辱——縲紲の中に  
 座せり。意の欲する所、言の命ずる所、事立どころに調ひ、従者一百侍女數十  
 金襴の裝玉錦の衣、一顧千金、一令佛國を蓋ひしの身は、跪ひて己れの臣隸  
 に對す。時運の然らしむる所と雖ども、又人情の忍ぶ能はざる所あり。嗚呼  
 人生は夢か、昨日は虚にして今日は眞か、否、今日は虚にして明日眞に入る  
 のときは死か、人生は實に奇あり。ルース十六世は知らぬ佛の心を以て  
 王位に就き過去の罪か祖先の怨を一身に引受けて、今は議會の前に立ち  
 再び繋ぐべからざるの性命は——理否に係はらずてふ壯士の玩弄物と  
 あり、連日黨々たる引導の下に千七百九十三年一月二十日に於て議會は  
 ——何等の權利によりてか——議決を以て死刑を宣告したり。ルース



も民約篇を書するに當つて此事あるべしとは夢にだも思はざりしあるべし。

佛國革命は已に親を喰ひ殺せり、豈に兄弟相食むに於て猶豫せんや。プレツサー等とダントンの争は未だ全く破裂せざるも内實は焰々として焚ゆるが如く、殊にマラーは舌頭常に毒矢を吐きロランダ等を中傷すると少あからず、而して一般人民も、パリス人は概ね皆ダントン派を助け地方人は多くはプレツサー派を賛し、一揆絶へず暴行を以て職務をあすものあるに至り、而してプレツサー等は味方を遠き有し、敵を近きに扣へ、パリス城中に在つて頗る其心の寒きを覺へたり、然れども寒に遇ふて愈よ其心を熱するは志士の胆あり、バルグナードはロヘスピエアがギランドン黨を目して保守黨と云ひしに對し雄辨を振つて曰く我々は果して保守黨か何が故に——何が爲に——保守とは正義の謂か——世間人

あり粗暴を以て活潑とあし、輕舉を以て有爲と爲し、人を苦しめ人を罵り以て自由の主義を取ると稱す——我は敢て是等の主義を妨ぐるものにて非らず然れども我黨は之に倣ふを欲せざるあり、死すとも之を爲すを得ざるあり、誦僧能く慈愛を口にして而して其行を殘虐にす、世間己れの自由を主張して他人の自由を壓倒せんとするものあり、我黨は劍鋒に當り砲口に立つも尙ほ邦家一般の自由を忘れざらんとを勉むるものあり、革命か天願くは此の革命を神聖にせよと。

已にしてロランダの卓子は辭職勸告書を以て滿たし、脅迫暗殺の流言は日夜絶へず、ギランドン黨の人は概ね皆同一の境遇に在つて動もすれば暴徒の毆打する所とあり危険云ふべからず、故に或は形を變じ風を換へ、夜半に往復して其業務を取るに至りしが、此中に於てマナンは尤も彼等の目指す所ありし、或る時マナンは危険を避けて他に移らんとす、人あ

り田舎婦人の服を勤め、マナンも其意に従ひしが、其の人髪かざりの不相應あるとを告げ之を代へしめんとせしに、マナンは忽ち取つて之を地に投じて曰く嗚呼我れながら愚かあり、我に果して何の罪かある、豈に青天白日の身を以て故らに天に跼し地に躄し、衣を變じて以て田舎の婦人を扮するの愚を學ばんや、我れは佛國の一婦人あり、世人皆狂するも我れ幸に一片の心あり、何ぞ此心を枉げて彼の狂に倣ふべけんや、我は最後の重役を演ずべきあり、我は一步も此家を去らじ、生きて此家に住む、死するも此家に於てすべきありと。

## 其三十五

ローランドは温厚篤實の士あり、元より革命場裡に向つて馳驅奔走すべきの材に非らず、唯マナンの之を助くるあり、從來邦家の爲を思ふて波瀾の衝に當りしが、ダントン等はルイエス死して其暴力を肆にするに處る

く、轉じて全力を舉げてローランドに當り、ローランドを自してローランド王と呼び、事に觸れ物に應じて攻撃侮辱を加へ、果ては流言を構造してローランドは佛國政府巨額の金を私用し、私に之をロンドンバンクに預けたりと稱し、一犬虚に吠へて万犬實を傳へ、嗚々嚙々殆ど解くべからざるの際、ローランドは過度の勞苦のたゞりけん病の床に打ち伏して身動ささへも得あらねば、一方に於ては世人の疑を解くの暇なく、事物曖昧の間に辭職し去りしかば、ローランドの境遇は一層困難の中に陥り、氏は將に地方に赴かんとせしに、反對黨は之れを許さず、ローランドを被告の地位に置き、飽くまで其事實を審査すべきとを決せり。

此間兩黨の軋轢は愈よ甚しく、議會の有様は愈よ紛亂し、鐵拳飛んで問ふに由なく、刀を脱して身を護し、以て互に辯論を血氣の中に争ひ、殆ど條緒なきの議決を見るに至り、佛國の命脈は早や生死興亡の境に臨めり、此時

に際しデュエーモレーズの反逆ラベンダーの一揆カルバドの暴動等續々  
 興起し將に沈まんとするの佛國に向つて激浪怒濤を打ち寄せしが、マン  
 ドン派は早くも之を除けて、盡くギランデン黨の上に加へ、愈よ益々攻撃  
 して、到底是等の人々に邦家の指針を委するに足らずとをいひ、口に暴風を  
 吹き手に烈火を煽ぎしかば、ギランデン黨は殆ど水火の中に立ち又如何  
 ともすべからざるに至れり。

マントンはロベスピエール、マラー等に比して稍々穩和の手段を取り、且つ  
 黨派の争よりして邦家の滅亡を來さんとを恐れ、自他の間に周旋して平  
 和を謀らんことを勉めしが、茲に又兩黨の燒點に向つて彈藥とあるべき  
 一難題を生出せり。則ちマントン派は邦家の紛擾を治むるに主權者を要  
 するとを主張し、行政主宰者數人を撰で托するに一切の權利を以てし、以  
 て萬事を處分せしめんとを發議せり。然るにギランデン黨は疑もあく之

を以て反對黨の策畧に出づるとをいひ、パサーは其所見を開陳して曰く、彼  
 等は無政府よりも尙ほ恐るべき政府を立て一人の王に代ゆるに數人の  
 王を以てし、吾人の自由を蹂躪せんと圖るものあり。彼等は行政主宰者を  
 置て吾人は其下に生殺與奪を忍ばざるを得ず、吾人は已に命を以て佛國  
 の共和政府を買ひしあり、然るに彼等は又之を奪はんとするか、吾人は命  
 を以て之を護らざるを得ず。我が一身に取つては、我が身が今日まで生存  
 し來りしを以て無上の幸福と思へり、我は彼等が今日まで我が生命を奪  
 はざりしを謝せざるを得ず。今や自由の爲めに最後の防禦を爲すべし、我  
 が身は死すとも我が地位は動かざるべきありと。パルグナードも亦之に  
 應じて反對黨の到底平和と自由を重んずるに意なきの實を挙げ、他黨の  
 壓滅を期するものあるを示し、其れより今日行政主宰者を定めんとす  
 るの意を推して攻撃し、以て自由の賊平和の敵ありと痛論したり。

## 其卅六

マラーの眼よりすれば政府に立つの人は盡く壓制者あり、マラーの取る所は無政府主義あり、ギランデン黨を目して反虐黨と爲し、一日議會に於て公然——此議會は英國に奉事するの私黨より組織したり——と言ひ放ちしかば議會は忽ち沸騰しギランデン黨は中立黨と共に之を以て侮辱の甚しきものと爲し、其罪を糾彈すべきとに決せり。然るにパリスの輿論はマラーを助けたり、マラーは議會の命に依つて縛に就きしが、獄吏は人民の意を受けて之を扱ふと賓客を遇するが如く、此間パリス過半の人民は相連結してギランデン黨を彈劾し、以て迫るに至りしかば、議會も終に之を如何ともすると能はず、茲に解散を告ぐるに至れり。

時は來れり、ギランデン黨の命脈は迫れり、ギランデン黨はパリスに窘逐せらるゝも尙各地に於て多少の味方を有せり、或は之に依て再び回復を

圖るやの望なきにしも非ざりし、されど落日の勢は速に近附けり、其本據と頼みしマールセイユ、リオンの地は反動力の爲に支配せられて敵地と爲り、ラウエンデは人民と教會の争より變じて亂暴主義を唱ふるに至れり。此時に於てバルグナードは最早自黨の勝つ能はざるを見、之を争ふの却て邦家を滅亡せしむべきを知りしかば、撰舉會に於て演説して曰く、諸君よ我黨は無益の争を好まざるあり、諸君は此争の爲に決して邦家を忘るゝと勿れ、邦家に於て獨立自由を得ば我黨は假令十萬億土に投入せらるゝも毫も憾とせざるありと此語は則ちギランデン黨當時の一綱目とあり、人々皆之れに従つて進退せり、此語や却て無限の勢力を有し、一時人心をして再びギランデン黨の上に向はしめしが、其再びマラーを糾彈する日に於ては、パリスの人民は皆花球を手にして彼れに送り、贊助の意を表せしにぞ、議會も遂に之を處罰するを得ず、其儘マラーを放免したり。

マラーは知人に告げて曰く我にして自由を得たり豈に彼等を此儘に置かんやと。

五月卅一日に於てマナンはローランドと共に家に在り暴徒の叫聲を耳にして心穩あらず——是れより前きマナンはパリスを去らんことを望みしがローランドの一身自由あらず周囲の事情も之れを許さず身は命運の擒とありて尙ほパリスを去ると能はざりし——數週間病氣の餘マナンは床中に在りて過去未來の想界に漂ひ佛國の地位を考へ來りて未だ其の歸着する所を認めずローランドを思ひ又娘ユードラの前途を考へて轉た迷の雲群り來る。忽ち戸を叩くの音驚し之を開くや家人の案内をも待たずツカ〜と入り來る五六の壯士ローランドを引致すべき旨を告げたり。ローランドは其逮捕狀を示さんとを求めし彼等には所持せざりければ叱して曰く汝等何すれの者ぞ余は汝等に引致せらるべきの

理由なし汝等もし之を爲さんと欲せば何ぞ正當の手續を以てせざると彼等答ふると能はず再び逮捕狀に向つて引き戻したりマナンは之を聽て決然病床を出で容を調へて議會に馳せギランデン黨に告ぐるに事を以てし自他の覺悟を定めんとを圖れり。

### 其 卅 七

マナンは其雄略男子を壓するも元是れ一婦人あり婦人の身を以て世界最難の局に當る未だ曾て敵に後を示せしとあきも其の心の苦辛思ふべきあり。マナンは他人が他人の自由を蹂躪するを見て震怒せり然るに今や反對黨は故あくして侮辱を己れの身に加へ故あくして最愛の夫を捕縛し去らんとす豈に其情の其心を支配する勿らんや。取る者も取り敢へず急を同志に訴へんとして議會の方に飛行きしが又事ありナユーラリの廣廷は護衛兵を以て満たし戸口は皆數十の番兵を以て守れり心は

矢竹氣は張弓——マナンは何でふためらふべき。群衆を突進み、守兵の誰何に應へもせず——守兵も其れを見知りしか敢て咎めざるの間にマナンは辛ふじて扣所に入りしが、中は騒がし尙一層——是れより先市人數百名はマラー等と共謀してギランデン黨の人を捕縛せんとを議會に向つて請求、否命令し、議會の中にはロベスピエール、ナヤボー等が之に應じて以て毒舌を吐し、其議論燒點に達して、ギランデン黨は議會の樓上に座し烈火の下より燃へ来るを待つが如し。マナンは先づバルグナードに會はんと欲して心は、家に身は茲に立ちつ居つ、居つ立ちつ待つ間に時々開く戸の隙より議會の中を見渡せば、議會にあらで紛亂場、數百の人は片手に短銃、片手に繩、動かば撃たん有様にマナンの心は怒り天に達し、雷と爲りて議會を撃ち、怨は地に入つて地震を爲し、一震の下に佛國を碎かんか否マナンは滿腔の赤心注ぐに佛國を思ふの愛憎を以てし、身に權利の

あるあらば此中に進み入り彼等を沈静し去らんかと思へり、然しマナンは此事を爲す能はず、マナンが精神は天地を壓せり、後世を壓せり、然れども此時を如何ともする能はざりし。

バルグナードは幸に彼等の目を免れて出で來りしが、マナンを見るより其意を察知して告げて曰く最早や議會に向つて事を望むも益あし、マナン曰く我れも又之を見たり、多數は果して是か、多數の人今此事を爲す多數に任するの外あきかど、バルグナードは知人を集めて圖る所あらんと欲し、近傍を尋ねねれども皆在らず、歸りマナンに告げて曰く事や迫れり然れども急に圖ること能はず噫と、此の時マナンの身又最と危険ありしかば相約して辭し、其れよりマナンはローペーを訪ふて一書を托し、馬車を驅つて家に歸りしが、ローランドの身の上を思ふて心飛ぶが如く、駿馬の馳するも遅きが如し、離て間近に來りければ車の止まるを待ちやらず

身を跳らして家に馳せ入りたり。  
 マナンの家に入るやローランドは家に在らず、急がはしく其の安否を尋ねしに、知人の家にあるとを聴きしかば、少しく安堵をし、自ら其處に赴きて告ぐるに次第を以てし再び圖る所あらんとして議會に向ひしが、以前の番卒は已に去て唯大砲二三挺の横はるを見るのみ、僅か二時間前に四方の人衆相持して一大事も起らんかと思ひしとは夢のあと、佛國人民變轉不思議の舉動にはマナン自らも一驚を喫したり、茲に於てマナンは空しく歸途に就く、日は已に暮れ果て、街上は燈を點じられども、夜景自ら常に異ありて、人影少く、馬車ボントニユーフに停りしとき、憲兵の誰可を受けしが、何事もなく家に歸り、熟睡せる娘ユードラの顔を見て一滴の涙にペンを滋ほし、一書をローランドに向つて書せんとする折、戶外に人あり、再び戸を叩くと頻りあり。

## 其卅八

時は恰も十二時あり、楮子を上げる足音は尋常あらず、マナンは尙も筆を振ふて紙に對せしが、忽ち入り来る殘虐の公使其數七八九十一人のものマナンに向ひローランドの所在を尋ねしに、知らずと答へしかば、他の一人は無禮にも、妻として夫の所在を知らざるの理あしと言ひながら勢ひ猛く進み來りしに、マナンは懲忍として曰果して之を知らざるの理なきか、我も又爾等に對して答へざるべからざるの理を、爾等は何の理に依て此問を爲すかと、彼等答へず相耳語して此室を出で戸口に二三の番兵を止めて何處ともなく立ち去りたり、マナンは食を命じ書翰を裁し且つ諸事を始末して寢に就き、身の疲れと心の強さは迫る危難をもものともせず、安すくと打ち眠りしが、此間凡そ一時を過ぎざりし、下婢來り起して曰く、人あり面會せんとを求むと、マナンはそれと心得、二重の衣服を着

けしに、下婢驚て其故を問ふマナンはさわらぬ肺に答へて曰く戸を出づるには注意を要すとは茲ありと——下婢マナンの顔を見て其意を悟り爲に涙にむせぶと久し。

所用あり爾を引致す——とはマナンが戸口に出でし時の警語あり、マナンは是を聽て其不法を憤りしかども又相争ふの無益あるを知り、其意に任せしに、始審判事來つて家宅搜索を爲し盡く品物を封じ去らんとす。マナンは娘ユードラの衣服を請ふて之を取り出し一書を裁して托する處あらんとせしに、一吏あり進んで其名宛を知らんとを求む、マナンは忽ち之を寸裂し終り以て禍の知人に及ばんとを防げり。又無敵の壯士あり、法外の心を以て法律の名により、續々家内に侵入し來る時に夜將に明けるとして燭光次第に色赤し群り來る顔は青色を帯びて殊にすさまじく手荒れ足跣に、未だ曾て貴婦人の前に立ちしとききの徒を見てマナンは

思はず窓を開きて清爽の氣を導けり、下婢等は皆驚いて爲す所を知らず、慈母愛嬢相抱いて將に別を告げんとす、行くものは一度入つて出づるとあきの獄屋に向ひ、止とまるもの又其生を保すると能はず、千邊無量の思を打ち絶つて引き立つる木石漢、堅きを和らぐ涙の力も彼等の目には一滴の水——水とほかは見えざりしあり。

マナンは事に臨んで憂慮すると多し、然れども其一度膽を定むるや何物も恐るゝことあし、マナンの戸を出づるや一吏曰く路傍爾を待つ人多かるべし、マナン曰く然らん我は我が心に人民を愛せしを知る、一事の邦家に背きしを知らずと。此時街上は人民と兵卒とを以て満たせり、マナンの容貌は背高く體直く肅然として群衆を突き進み、獄車に上ぼりし様は、數年前拍手喝采の中に自由の聖殿に向ひしときと異ならず、今は六月一日の朝七時あり、景色は全く以前に異あれり、此自由の恩人に對して——



無辜の民は無智の罪に蓋はれて掌を拍て叫んで曰く——首斬臺へ其奴を首斬臺へ——と一吏あり爲に馬車の戸を閉さんとせしに、マナンは之を止めめて曰く雲霧は世界を蓋ふも日月の光は依然たり。我は何事をも厭はず、又何物をも畏れず、唯彼等が我が心を知らずして此事を爲すを憐むのみと。吏曰く——爾は實に丈夫の精神を有せり、靜に公平の裁判を待たれよ。マナン曰く公平の裁判あらしめば——が、我は罪と惡とを恐る、身に罪なく惡なきか、首斬臺は我が爲の極樂場ありと。

## 其卅九

マナン、ローランドはギランデン黨の精神あり。マナンの獄窓に繋がる、や反對黨は愈よ勢を加へてギランデン黨を攻撃し、マラーは自ら主謀者とありて暴徒を召集し、大砲小銃を連て密に議會を取り巻き、中立黨を強迫して二十二の鎧々たるギランデン黨員を處罰せんとを決せり。其中に

デユカスあるものあり、黨員と親密の關係ありしを以て捕はれたり。マラーはデユカスの年少にして又深く意とするに足らざるの故を以て之を許さんとせしに、デユカスは罵り退けて曰く廿二の義士に加はりて生死を共にするは我が爲に無上の光榮あり、豈に爾が恩恵に依りて生を虐賊の間に盗まんやと。

此時に於てマナンの心情は如何ありしか、頗る常人と異なる所あり。マナンは其手記中に書して曰く事實は實に想像と異なる所多し、我一生中に於て尤も快樂あるの時は、人の尤も苦痛とあすの時ありし、要するに快樂は心の中に存して心の外に在るものに在らず、此心を以てせば到る處皆快樂にして、殊に窮困の中に立つて其の味の愈よ眞あるを覺ゆと。蓋しマナンの一生は清淨あり、内に顧みて疚しきこと更らにあし、義の爲めに一身を捧げ、人の自由の爲めに己れの自由を讓るも亦其心の自由を樂しむ

あり殊にマナンは夫の爲めに盡せり、婚姻の始より今日に至るまでマナンは己れの才能を擧げてローランドの爲めにし、彼を助け彼れを勵し共に其の地歩を革命場裡に占むるに至りしあり。マナンとローランドとは好對の夫妻にてはあらざりし、夫はマナンの齡に先つこと二十歳其性質も非常に異れり、言ふ所爲す所マナンをして心を苦しむること多かりし。然れどもマナンは直接に反對の意を示せしとあらず、常に彼を尊び彼を敬せり、故に其間の情愛の如きも夫妻と云はんよりは寧ろ父子の如きものありし。夫妻にして父子の如くあるは二者の爲めに快樂の一生を得しものと云ふべからず、其心術に於て——殊に活潑雄壯あるマナンの心術に於ては忍ぶべくして忍ぶ能はざる所を忍びしとあらん。それや是やの煩慮より、加ふるに佛國塵埃の社會に處するに清潔寶玉の身を以てし、而して其身は邦家の命運と共に進退せざるを得ず。一日社會に在れば一日の

義務あり、マナンは如何ある困難に際するも、此義務を欠くことを欲せざるあり。マナンの身は實に重きを負へり、夫を負へり佛國を負へり。然れども今は獄中に在つて——單身自由の身とあれり。書に依て友を古代に求め花に對せば花常に笑ひ、花に嘆息の色なし。マナンは幼少の時より今日に至るまで此二者あれば其の心は満足あり。タムソンの著「シーツ」と題する一書はマナンが殊に愛讀せる處にして、引致の際に於ても手を放さずして今は茲に伴へり。此の外にマナンは己れを獄屋の中に導き來りしとも云ふべきプリユマーチ、并に平素慕ふ所のヒュームの英國史を取り寄せ、夕に死するの身を以て頻りに朝に之を讀み、又ミッセス、マコーレイの英國革命史を得んと欲せしが、不幸にして之を得ず、否之を得ざりしは幸ありしあらん——身は佛國革命の中心に在つて此境遇に立ち手に英國革命史を取らば假令マナンの心は金石ありとも豈に多少感慨の其胸を

破るとあからんや。

其四十

一輪の薔薇花あり以て能く満室を薫するに足る馨香の及ぶ所賢不肖と  
あく貴と賤とあく皆よりて以て心を快にするを得。世間威徳ある人の其  
周圍に對する又此くの如きものあり。其何によつて然るやを知らず。然れ  
ども人皆側にあらんとを願ふ。マナンの獄中に在るや竊盜強賊殺人奸淫  
者と相隣り。始の内は彼等は罵々嘖々讒謗罵詈の言語を以てマナンの耳  
を打ちしが、彼等がマナンの人と爲りを知るや否や、何れも期せずして言  
語舉動を謹み、マナンを敬愛するの念を生じ、相共にマナンの意を仰ぎ、荒  
原の猛獸も一朝にして馴れ來りしが如きの様を呈せり。獄吏——囚人に  
向つて無限の權力を有し、憐憫は職務の大敵なりと心得たる獄吏の如き  
も、マナンに接して知らず識らず涙を拭ひ、殊に一獄吏の妻はマナンを敬

愛するの心に其身を忘れ、マナンを己れの室に招じて一日數時間自由に  
來訪者を延見せしめたり。社會に在つて勢力を占めしマナンは獄中に  
在るも異なるにあし、否其勢力を倍せり。友人ホムスはユードラの爲めに  
必死の力を盡し、ローランド、パザー、ピージョンは各地に出沒して以て在  
朝黨の不正を憤り、マナンの爲に私に折齒扼腕するもの其數を知らず。茲  
にギランデン黨は再び同志と提携して以て爲す所あらんとするに至れ  
り。  
此間パザーはローランド等と圖り、一策を畫してマナンを脱獄せしめん  
とし、私に其意を通ぜしに、マナンは之に答て曰く我はいふべからざるの  
喜悅を以て幾度か爾の書翰を読み、幾度か爾の名に接吻せり。我は此中に  
在つて二十二の我黨員皆縛せらるべしと聞き、頗る爾の安否を愛ひたり。  
然るに今や安全にして彼地に在り能く計畫する所あるを知り、我が望の

未だ滅せざるを覺へたり。爲せよ爾の爲さんと欲する所を爲せよ。昔者アリユタスはフヒレツピの一敗に失望して遂に最後にあらざるの最後を取れり。一人我黨の士あり以て能く佛國を自由にするを得べし。豈に爲し能はずといふを得んや。

我は爾の書によつて爾の厚意の我が身上に注ぐを感ぜり。然れども決して輕卒の舉動に出で、爾の名を傷け併せて我が名を害すると勿れ。我は將に心を靜にして命運の回るを待つべきあり。知友よ我が爲に圖るを止めて佛國の爲に圖れ。佛國の爲にするは則ち我が爲にするあり。苦か勞か將た死か唯一時のみ、我豈此の小事を意として佛國永久の事に換へんや。願くは之を思ひ之を勉めよと。

茲に於てバザイ、ローランド等は曾て普墮の軍に對して奇功を建てたる大將ウインプフエンと結托し、兵を擧げてパリスに向はんとせしが、時利

あらず人和せず、中途にして其鋒を收むるに至り、結果は却て反對黨の乗ずる所となり、ギランデン黨は終に立つべからざるの境遇に陥れり。是れ偏にバザイ等の策拙きに由るに非ず、黨勢の墮落するは丸を峻坂に轉するが如し、一木一石の路に横はりて支ふるあるも止むべきに非ざるあり。然るに是より凡そ三週間後——茲に時運は變ぜしか、夢かうつゝ、か凶か吉か獄吏あり突然マナンに告げて曰く爾に罪あり放免すと。

## 其四十一

凡そ人生の樂濃かに喜び妙あるの瞬間は、新に暇を鐵窓に告ぐるの時にあり。人の此中に在るや時は日よりも長く日は月よりも長し、禁獄周歲待ちに待ち、望みに望みたる期満ち、再び青天白日の身とあるときは、其情感錦を着て故郷に歸へるときよりも切あるものあり。況んや其周圍の事情暗黒にして何時晴るべきとも見分たず、身は絶望の中に在つて前途唯

死あるの場合に際し、一天遽かに晴れ渡り無罪放免の聲を耳にするの時  
 に於てをや、其喜悅實に云ふべからざるあり。マナンは先きにバザーに書  
 を與へて獄中の却て處し易きを告げたり、然れども個は唯丈夫時に處す  
 るの言のみ、豈に人生の至情あらんや。見よマナンが放免の聲を耳にする  
 や取るものも取敢へず、直に獄室を出で馬車に乗じて我が家に至り——  
 今抜け出でし籠の鳥飛ぶが如くに馳せ入りて、驚く家婢等と喜ぶ顔、互に  
 見合す暇もなく、直に又馳せ出で、娘ユードラの在所ある知人の許に向  
 ひたり。正に此家に來り將に階子を上らんとす、二人あり等しく呼んで曰  
 く待て、マナン、ローランド——マナンは顧みて——何故に——二人は左  
 右より進み來つて——法律の名により汝を捕縛すと、此間殆ど二時間を  
 出でず、佛國政治の方針は史家をして其那邊に存するかを疑はしむ。され  
 ど之を疑ふは此時を知らざるものあり、此時は即ち無法を以て事物を支

配するの時あり、豈に獨りマナンの身上に向つて之を怪しまんや、とはい  
 へ顧みてマナンの心悟より察すれば無法にも其程度あるべきを嘆ぜざ  
 るを得ず、獄を出で、最愛の娘を訪ひ、其顔を見て其手を取り、其口に吻し  
 其心を暖めんと、急ぐ心や天も地も共に動かんばかりある滿腔の情を遮  
 ぎつて、捕縛の身と爲せり嗚呼、吁噫。

マナンは再び獄室に繋かれ、以前に増して一層嚴重の取締を受くるに至  
 りければ、流石鐵石の心も碎けたり。一時はローランドを思ひユードラを  
 思ひ又身の上を顧みて落嘆の淵に沈みしが、漸くにして心を奮ひ起し過  
 ぎし昔を顧みて、あれやこれやの記憶に止まらざるものを集め、後の世の  
 人々に益するともあれかしと、竊に筆を取て之を書き下さんとを決せり。  
 時恰もパスナール墮落の四年期ある七月十四日の夕刻に於てパリス城  
 中一珍事を生出せり、脊高く顔美に、雪の如きの白衣を着て、ノルマンデー

の女帽を被むりたる一處女、ルーデス、マーテレスの一大宏屋に來り、彼の殘虐の公子マラーを見んとを求む。其の名は即ちチャヤラット、コーデーあり。コーデーは當時ギランデン黨の根據を聞へたるケーンより來れり。何を爲さんと欲してか——事は告げず單にマラーを見んとを求めり。マラーは幸にして家に在り否不幸にしてコーデーを延見せり。コーデーはギランデン黨の密謀を告ぐべしと爲し、直に進んでマラーを刺せり、其心を徹して之を殺し、己れも亦死せり。

パリスの人民はマラーの死を以て恰も一愛國士を失ひしが如きの感を爲し、其葬式を盛にし、議會も内閣も之が爲に吊意を盡しければ、マナンは聽て嘆じて曰く、實に佛國は善惡を混同し是非を轉倒せり、マラーは一鼠賊のみ彼をして此終を取らしむ固より其所あり、然るに滔々たる天下之れに向つて敬禮を加ふること斯くの如し、人心の狂亂何ぞ一に茲に至る

や、我は生きて此の社會に出でんよりは寧ろ斷頭場裡の露と化すべきありと。

## 其四十二

事は宇内歴史中の活歴史ある佛國の革命あり、人は革命場裡に在つて幾多丈夫の進退を指揮せしの人あり、而して此の人や身は獄中に在つて、足墓邊に立ち、正に是れ人生心悟の眞に迫るの時あり。此人にして此時に當り此事を書下す、豈に其筆端の光輝千歳の下を照すを怪しまんや。マナンは筆を取つて己れが政事に對する豊富なる思想と經歷とを歴叙し、己に三分の二を終りて秘かに之を知人に托せしに、當時反對黨の殘虐ある惡價以て之を求め、匿すものは償ふに生命を以てせしむるの場合あれば、知人も頗る恐を懷きて一朝之を燒却し去るに至れり。著者の之れを聞くと、忽ち書き掛けし筆を投じて曰く、此望を燒かんよりは何ぞ此身を燒かざ

ると、失望の中に數日を送りしが、人ありブレッサーも亦獄裡に捕れて著述に従事し居るとを告げ、マナンに再び採筆を勧めければ、マナンも心を取り直し、勇を鼓し筆を振つて、初めより之を書き始めしに、殆ど一ヶ月にして政事上の歴史を終り、爾後三週間を以て、己れの小傳を草せしが、此小傳は則今日に於て佛國文學界の一經書あり、筆を記號の尋ね得べき幼少の時より起して、之を婚姻の夕に止めたるものにて、筆々自ら神あり、思を慈母の懷に馳せて小兒心の罪なきを樂み、歩をミュードンの花園に移して轉た清明の晨を喜び、或は尼寺を見舞ふてオルガンの聲を數十年の昔に聽き、語を禽鳥に寄せて祖母の安否を有無の間に訪ふに至り、此間附するにマナンが高尙にして且純潔ある哲學上の思考を以てし、一生中の前半期を寫出し、世の讀者をして之れを其の後半期ある限りなき、暴風を凌ぎし的身と對照し、以て限りなきの感慨を惹き起さしめ、愈よ讀んで愈よ

其趣味の深きを覺へしむ。

此時に至るまでマナンを獄窓に訪ひ厚意を致せしを以て反對黨の指摘する所とあり、獄中に繋がるゝもの多かりしが、マナンを訪ひ來る人は依然として舊に依つて繁し、數十年前尼寺に於て僅か數月の起居を共にせしものにして、此事を聞き一身の安危を賭して日夕に訪ひ來る者アギヤサあり、中にもヘンリートはマナンの境遇を見て如何にもして之を助けんと計り、一日マナンに説くに自他の衣を換へて自ら獄裡に止まらんを以てす、マナンは其厚意に感ぜり然れども之に答へて曰く、爾の血を以て我生命を救はんか、否々我は百度死するも之を爲す能はざるなりと。相泣いて分れたり、マナンが獄裡の著書はボスツの手依つて保存せし物あるが、其最後の紙を渡すや告げて曰く、再び來ると勿れ恐くは爾の事を誤らんと、ボスツはマナンの著書を手にして之をモント、モレンシ

一の林間ある大木の洞に匿し、後身自ら反對黨の目指す所とありしとき  
 は之を懐にして四方に流寓し、農夫に扮し奴隸と變じ、一心保存して後日  
 に至り、遂に能く之を佛國公衆に示すを得、幾多無数の後進をして其向ふ  
 所を知らしむるに至りしあり。

ギランデン黨の中ブレツサー、パルグナード、パレーズ、デユカス等は捕は  
 れて已に獄中に在り、バザール、ピエリジョン、ローベール等は地方に潜伏して望  
 を萬一に繋げり、然かるに反對黨は事速に決すべしと爲し、バザール等に代  
 ふるに他のギランデン黨員を以てし、都合二十一の傑士を法廷に引き出  
 し、之を處斷するに至れり。

### 其四十三

千七百九十三年十月二十四日のとありき、ブレツサーを始として廿一の  
 ギランデン黨員——曾て佛國自由の烽火を舉げ歐洲人の目を驚かした

るの傑士は列を正だして名譽の法廷に立てり——眞に名譽あり世間罪  
 なくして法廷に立つと程名譽のことはあらじ、聽け反對黨の辯難は支離  
 滅裂殆んど條緒を分つべからず、或はブレツサー等を詰責して王黨とあ  
 り地方黨とあり、佛國共和政府に對して非謀を懷く者ありとあり、或は之  
 を攻撃して曰く、彼等は佛國の殖民地を滅絶せんとするものあり、何とあ  
 りれば彼等の政策は奴隸を解放せんと圖りしを以てあり、其シャンブ、デ、マ  
 ーの虐殺に關しては曰く、是れ偏にギランデン黨の罪あり、何とあれば彼等  
 は徒に自由の請願に捺印せしめんと企てしものあればあり、又曰く、彼  
 等は佛國の平和を破りしものあり、人心を攪發して妄りに國王に抵抗せ  
 しめしは則ち彼等に非らずやと、蓋し此事や盡くギランデン黨の奮身奮  
 力以て佛國の爲にせしものにして、眞に其黨の名譽と爲し、人民たるもの  
 永く記憶に存すべき事たるに過ぎざるあり。



已に斯くの如きの事實にして斯くの如きの難問あり、法官たるもの如何に偏頗心に富み、彼等を罪するに意ありと雖も、容易に所決し得べきに非ず、紫を指して黒と云ふ、尙ほ欺くべし、白を指して黒と云ふに至ては狂人も少しく躊躇せざるを得ず。故を以て辯難連日、反對黨は之を速決せんとを迫りたれども、法官も又如何ともする能はず、最後にバルグナードは燃ゆるばかりの雄辯を以て其辯難の不法あるを辯折し、一々事實を指摘して、毫も佛國に對して自黨の罪を得べき理なきを明にし、以て聽者の耳に訴へしかば、聽衆は勿論陪審裁判の官吏等も爲に其心を動かし、皆私かに涙を拭へり、實にバルグナードの演説はギランデン黨の爲に氣焰を吐き、反對黨をして顔色あからしめたり。此時もし裁判官にして一片の胆あらしめば、ギランデン黨を放免するを得しや、勿論あり、然れ共如何せん此の法廷は反對黨の一機械たるに過ぎざりし、反對黨は此の有様を見て猶

豫せば事知るべからずとあし、裁判官に強迫の命令を下して直に所斷すべきとを以てし、遂に十月卅日を以て法廷は一點罪無きの土に向つて、有罪の極ある死刑を宣告するに至れり。

ギランデン黨の心情を推察せよ、誰か能く此際に於て其心の平均を持するを得んや、彼等は固より死を恐れざるあり、然れども斯くまで佛國を思ひしの身を以て佛國に對して虐賊の名を負ひしとを遺憾とせり。彼等は此名に由つて此刑を宣告するを聴くや、切齒せり、扼腕せり、少壯血氣の徒は怒髪天を突き、激足地を鳴らし、以て言ふ所あらんとせしが、其爲すべからざるを見て、バレーズは懷刀、胸を貫ひて死せり。此の時ローソックスは裁判吏を睨んで叫んで曰く、余は佛國人民か狂せしの際に於て死す汝等は彼等が本心に歸るの際に於て死すべしと。プレッサーは泰然たり、然れども其の胸中は疑もあらず、妻を思ひ子を思ひ、邦家の爲めに奔走せし身の餘

力あかりしを以て、殊に其の行末を思へり。デユカスはホンフリードと朋友の故を以て茲に至りしあり、ホンフリードはデユカスの首を抱ひて曰く余は余が爲に爾をして茲に至らしめたり。デユカスは靜に答へて曰く我が本望あり、我等は共に人生貴重の死を同ふするを得るに非らずやと、バルグナードは毒藥を用意せり、されど其多人數に分つに足らざるを以て、之れを地上に擲つて曰く我れ豈に獨り同志の最後に先つに忍びんやと。

## 其四十四

甘の傑士將に法庭を辭せんとするや、傍へに斃れたるパレーズの遺骸に對して其額に吻し——待てよ明日まで——と言ひ置き、て其々に軍歌を奏し、死出の旅路に向ふ身のイヤ勇ましき其様を見る心ある人々は、我を忘れて死を忘れ、其に行かまく思ひけり。甘の傑士——手に萬貫專制の歴

力を壓倒し、口に歐洲自由の氣を吐き初めたるの傑士は、ブレッツサーを長者として其齡未だ四十に達せず、少壯富贍正に佛國の大計を定むべきの人に於て、今此最後に迫る、佛國百年の事知るべきのみ。

夜半に至り人あり私かに酒食を獄室に贈りて別宴を開くの用に供す、蓋し其何人より贈りしものあるかを知らずと雖も、志士の爲に千金を惜まざるの手に出でしものあらん。海山の珍味、最上の酒類、百花色を交へて無限の厚意を寓し、用意周到又一物の遺す所なし。一同は此間に座して、或は酌み或は喰ひ、ソクラテスの最後を談じ、ホルテリア、デヴァラーの言を思ふて死を見ると歸するが如く、時に奇言の耳を打つて滿室の笑聲、獄壁を動かすを見る、知る他の獄囚半夜夢を破りて、隣室甘の傑士は明朝青天白日を見るの故を以て、今夜の談笑斯くの如くあるかと——眞に彼等は明朝を期して青天白日の身とあるあり。彼等は闇黒汚穢の社會を去て純潔

白雲の郷に向はんとす、見よ彼等の心は勇めり、歌へり、吟せり、跋行の盃は紅顔を呈して彼等の行を盛にせり。されど今は時移りて人皆笑談にもうし、燭光漸く淡色を帯びて東天將に明けんとす、傑士の心は一樣に佛國に歸れり、佛國の前途を思へり、時に傑士の眼は徐にパレーズの遺骸に向ひ、相顧みて言さく、満室爲に寂然たり。

待つにはあらねど、待たるゝ身の最後に向ふの心には、時去り時來りて、時計の針も何となく速に、ものさはがしく、蠟燭は已に盡きたり、秋の日は早や明けたり、此時に至るまで人々皆默然たりしが、バルグナードは靜に靜閑を破つて曰く我等は今我等の那邊に在るかを知るか、パレーズの遺骸は茲に在り、我々の遺骸も亦彼處に在らんとす、然れども安意せよ此心は奪ふべからず、此心は滅すべからず、我は此岸に立つて明に彼岸を望むを得望は確、かあり、行く處は清らかあり、我々は已に我々の心に對して一點

欺かざるの旅行証を有せり、豈に又行路の難きを憂へんやと、時恰も十時を報じ、獄吏は來りて廿の傑士を指し招き、五輪の馬車に打ち乘せて斷頭場に急ぎけり。

死は鴻毛より軽く泰山より重し、死は人生最後の大試験にして宗教家の所謂天國に及進すると地獄に墮落するとの瞬間あり、又曰く死は猶ほ文章の結末の如し、一句結び得ば以て全篇を振はしむべく、而して人は死すべき時に死せざれば死に勝りたるの恥あり、一生は假令善美の錦を織り來りしも茲に至つて全く之を抹却するとあきを保せず——嗚呼廿の傑士に向つて此言を爲すは無用ありし、彼等が死に向ふの有様は新に戦勝を得たるの將士の如し、揚々として一齊に凱歌を奏し、パリス城中を通じ、人衆が惡意を以て叫びたる——佛國共和萬歲——の聲は彼等か爲には好意を以て——佛國共和萬歲——と唱へしめたり、彼等は皆從容とし

て斷頭場に立てり、ブレッツサー等が最後の看念は佛國の行末と、妻子と、マナンの身の上ありし、知らずマナンは此間如何ある境遇に立ちしか。

## 其四十五

マナンの歴史小傳を終るや謂へらく我が事成れりと、心靜かに死を待つのみありしが、悟りし身にも悟り兼ねるは愛惜の念あり。マナンは常に暗窓に向て娘ユードラの面影を畫き、其行末を思ひやり、かよわき女の寄る邊なく、深窓の中に人と爲りし身を以て、雨に伏し風に眠らしむるとかど心を碎けば碎かるゝ、鑽石の鳴も、今は早や底なき淵に沈み行き、人目をき折には獨り涙の雨を漲らす。至剛の心は至柔の心哉、マナンはユードラの爲にせんが爲に自殺を爲さんとを圖れり。斷頭場に登るは固より恐るゝ所に非らず、されど其財産を沒收せらるゝを恐れたり。もし茲に自殺し去れば其財産はユードラの手傳はるべきを思へり。マナンは此意を以て

自殺せんと欲し、書を認めてロイランドに送り、其意の在る所を察して其最後の拙きを許されんとを求め、將に之を實行せんとしたりしが、ボスクの一書は能く之を止めたり。ボスクは其書に於て始にユードラの身上は必ず身を以て保護すべきを告げ、次にマナンに訴へて曰之を思へよ之を思へよ、爾の身が今如何ある境遇に在るかを思へよ、爾の身は世界歴史中の至大至貴の地位に立つに非らずや、爾はよろしく彼の基督の如く公衆の前に於て最後を遂げ、天下後世の標準とあり、模範とあるべしと。マナンは讀み終りて曰く實に然り、實に然り、嗚呼我れながら愚ありき。廿のギランゲン黨員が千歳腐爛せざるの遺骸を斷頭場に止めて彼の世に向ふや、佛國の革命は最後の恩人を喰ひ去らんとするに迫れり。事は唯二週日前ありしルイイス十六世の後アンテオテテは曾て至尊の身を以て面も至愚の心を以て、其報果を斷頭場裡に受け、マナンは今全く反對の

側より佛國の爲に尤も盡し佛國の爲めに尤も思ひしの身を以て等しく其最後を分たんとす。此世の中は種蒔の時、彼世の中は採果の期とは言へあがら、實に條緒なきとあらずや。

マナンが最後の記事は多く同獄の人ビュイグナーの筆に係る物あるが其書に據るに——ビュイグナーは固とマナンを信ぜざりし、謂へらく是れ狂性女子の類あらんと。然かるに一度マナンを見、同窓の人等と共に其の話を聴くや、驚いて曰く余は未だ曾て社會に斯くの如きの女子あるべきを思はざりしあり。マナンの識や高く、論や深く、我れ其程度を計ると能はずと。ビュイグナーは其終に記して曰く此の女子にして此の識と此の辯あり、知るべし、天下の丈夫之を仰ぎ之に従ひ以て進退を一にして今日に至るやと。

マナンが將に最後の法廷に立たんとするや、敵も味方も一様に其無罪放免せられんとを望めり。此の日マナンは佛國貴婦人の禮服を着し、白羽の女帽を戴き、裙地に逆すると三尺片手に之を取り、從容笑を含んで出で來りしに、婦人女子の群り來るもの其數を知らず、皆進んでマナンの手に吻し、是に吻し、涙を以て之を洗へり。其遠くして近づく能はざるものは聲を放つて天に祈り、地に禱り、熱心以てマナンの無事を願ひしが、マナンは靜に手をふつて曰く悲む勿れ、慥く勿れ、人は善を爲し望の中に棲めば則ち足れりと、獄吏亦爲に泣けり。此の時ビュイグナーはマナンに告ぐる所あらんとして來りしが、時迫りて已に獄卒の呼ぶ聲頻あうければ、マナンは握手してさらば、時來れり——と言ひあがら、目を舉げてビュイグナーの顔を見しに、ビュイグナーが満目の紅涙抑へんと欲して抑ふる能はざるの様を見、唯曰く——ビィ、プリーナ。

## 其四十六

其心を奴隸にし其容は嚴然と椅に扣へたるの判事はマナンに告げて曰く茲は法庭じや、多言は要せぬ。問ふ所を明白簡單に答へよと。已にして問ふて曰く爾は夫ローランドが未だ内閣に入らざる前シャコピン黨の通信委員ありしことを知るか、マナン曰く然り、判事曰く爾は爾がローランドの名によりて是等の通信を認めしことを記憶せざるか、マナン曰く我が夫は我れをして之を筆記せしめしとありしも、未だ曾て我をして立案せしめしとはあらず、判事曰く爾は爾の夫が輿論構成所あるものを立て、人心を煽動し兵力を以てパリヌに打ち入り、佛國共和政府を撃破せんと企てしとに關せざりしか、マナン曰く我はローランドが箇様ある黨派を設けしことを聞かず、又た我も箇様ある事を執行せしとあり。我はローランドの爲せし所は共和政府の爲に盡し平和と秩序とを保つに汲々たりしを知るのみと、判事の問ふ所は元是れ捕風捉影の言のみ、確然たる證據あるに

非らず、茲に至つて糾問に窮せしか、又問ふて曰く爾はローランドが何月何日にパリヌを去り今其何處に在るを知れるか、此時マナンは—— 個は知るも知らざるも答ふべきの限にあらずと云ふや—— 早くも判事は是れ罪あるを知りて蓋はんが爲の下心ありと妄察し、一證を得たるが如きの心地せしが、マナンは言を續て曰く被告は法庭に立ちて已れの事に關し陳述するの義務あるも、人の上に對して答ふべきの理あるを、爾は我を被告として茲に立たしめしか、將た又ローランドの證人として呼び出せしか、ローランドの身の上に関し被告ある我が答ふるの必要はなきあり、又假令我をしてローランドに對する證人の資格たらしむるも、天下の法律は妻をして夫の所在を發がしむる程殘酷ならざるべし、好し爾は之を問はんを欲するも我は天地自然相愛の大理に據て之を答ふる能はざるありと、茲に於て判事は語盡きて怒に堪へず、忽ち法庭を閉ぢ去りたり。

此日証人として法庭に立ちしもの三人一人はユードラの乳母ありしが、時の勢に恐れマナンに對して不利益の側に立ち、他の二人は料理人と下婢にして共に身に換へてもマナンを救はんと圖り下婢は之を思ふの餘り其心狂亂し言ふ所を知らずして退場を命ぜられ料理人は其言の効をきを見、法庭を出で、後自殺し去れりとあん。

パリス義侠の狀師チャボ、ローガードは如何にもしてマナンの爲に辯護の勞を執らんとし、數々マナンを獄裡に尋ねしが、千七百九十三年十一月八日に至り辯護の方法を定めんが爲めにマナンを訪ひ暫らく談話の末、將に別れんとせし時、マナンは卒然立つて指輪を脱し、ローガードに贈り、ローガードは拜謝して——然らば明日法庭に於て——と言ひ捨て去らんとせしに、マナンは靜に曰く明日は是れ我が最後の日あり、我れは爾の辯護の價值あるを知るあり、然れども此價值も猛虎の耳には益をなし、恐

らくは我を救はんとして我と爾とを併せて殺すに至るべきあり、我の身の上は已に定まれり、豈に爾をして空しく死を分たしむべけんやと、此の言の如くありし翌日、マナンの法庭に立つや更に辯論を用ぬず、判事は已に事實明白ありとあし、殘酷にも非道にも不敬にも無禮にも無冠の女王マナン、ローランドに向つて死刑を宣告せり。

## 其四十七

マナンが死刑の宣告を受くるや、判事に向ひ靜に拜謝して曰く、爾は我をして彼の甘の傑士と最後を同ふせしむるか、光榮是より大あるはあし、我已に此光榮を荷ふ、豈此際に躊躇して彼等の芳名を穢すを爲さんやと、靜々法庭を出で、再び獄屋に歸りしが、其様は其來る時と異ならず、室に入るに際し常の如く笑を含んで獄吏に其勞を謝せり、然るに獄内の人々マナンを見て其死刑に處せられしを知るや、否や、號泣の聲四方に湧き、中に

リホールある者自ら牀を床上に投げ出して——天地は茲に滅しぬ——  
と叫びけるにマナンは手を取り之を扶けて曰く、何ぞ其心の小あるや、爾  
は我が爲に此言を爲すか、然れ共是れ我が心を知らざるあり、我は佛國の  
爲め、自由の爲め、今日あるが爲に生れ來りしあり、我は幸に一生を全ふし  
て今日に素懷を達せしありと。

時は十一月九日あり、此日陰雲天を蔽ふて日光爲に光なく、寒氣特に強ふ  
して冷風肌に徹す、一輛の馬車は獄屋の前に立つて刑人の出るを待ち、其  
周圍に群る人は則ちパリメの半狂民あり、血を見て渴を慰し、骸を見て食  
を助くるの徒は、其經驗に乏しからず、曾てパスナールの墮落に残酷を極  
め、シヤンプ、デ、マーの暴動に功名を舉げ、而して彼の王黨虐殺の勳章を擢  
へるの人あり、今や喜び來つてマナンの最後を見んと欲し、其苦を見其叫  
を聽て、晚餐一酌の談柄と爲さんとを望めり。

マナンの一生は是等の徒を愛せり、マナンは是等の徒に對すること慈母  
の赤子に於けるが如くありし、實にマナンの一生は是等の徒の爲に盡せ  
しものにして、則ち身を以て彼等の自由と平和とを保護し、此の目的を達  
せんが爲に來りしあり、然り、然かくマナンは一死以て彼等の犠牲に供す  
るあり、彼等は之を知らざるあり、慈母を目前に見て認めず、慈母の最後に  
向つて笑はんとす、天下麻亂人心狂醉の極、又如何ともする能はざるもの  
か、されどマナンの身は塵外に立てり——マナンは今獄車に上げられ、純  
清潔白の身を以つて首斬臺に進むは、將に天國に上るの階梯あり、眞天女  
——眞美人雪白の衣を着、綠雲背を拂ふて柳條柳腰に達し、眼は萬斛の愛  
を籠めて瞳は玉を銀波に漂はし、口は蕾の如くにして時に知人を目して  
少しく笑を含めば、花將に開かんとするに似たり、自然の威儀は周圍を照  
し、自然の愛情は滿面に溢れ、車靜に動けば、咲として飛ばんとす、アラス此



の人は尙ほ地上の人にして身は殺氣紛々たる宇内の革命場裡を通じて  
 斷頭場に向はんとするあり。車はクイ、テ、ラ、メ、シ、セ、リ、ーを過ぎてポントニ  
 ユ、イ、フに來り、斜にマナンの家を見て去れり。此家はマナンが生れし家に  
 して此庭はマナンが遊びし庭あり、彼の窓にマナンはプリユターチを  
 讀み以て共和の精神を養成せり。マナンが出藍の才能はプリユターチが  
 寫せし羅馬豪雄の大なるものよりも大なるの身とあれり。マナンは今之  
 を見て茲を過ぎ將に無窮の郷に向つて去らんとす、胸間豈に多少の感慨  
 あからんや、シーザーの勇氣も錦衣歸國の時に於て泣き、ナポレオンの英  
 邁も落魄故郷を望んで泣けり。而して先逝廿の傑士は相共に吟詠し相共  
 に鼓舞して其愛を分てり。今やマナンは單身此の境遇に立ち、故家を過ぎ  
 て泣かず、叫ばず、從容として去れり。マナンは眞に女子中の女丈夫たるの  
 みあらざるあり。

## 其四十八

此日マナンと共に最後を同ふすべきもの一老人あり、ラマーチと云ふ、  
 書匱造の罪を以て茲に至りしものあるが、車將に刑場に達せんとする時  
 流石に惡を爲せし身の死して後行くべき所を知らず、顔色青ざめ慄然と  
 して齒の根も合はず、眼を開き又眼を閉ぢて涙も得出でず、車側に伏し居  
 たりしが、マナンは之を慰め之を扶て共に車を下り、先づ自ら進んで斷頭  
 臺の下に立しとき、茲に最後の看念油然而として胸中に浮び來りしかば、獄  
 吏に向て紙と筆とを求めしに、獄吏は之を聽かず、斷然拒絕したり。鳥の將  
 に死あんとするや其鳴くや悲し、人の將に死あんとするや其言や善し、況  
 んやマナンの如き稀世の人傑が眞に迫まりしとき、思想に於てをや、營  
 世經國の道に向つて裨益を與へしや必せり。窠棲穴居人を殺し子を喰ふ  
 の蠻人と雖ども、尙ほ人の最後に向つては其言はんと欲する所を言はし

む、何物の奴輩ぞ、之を拒み以て一字千金の思想をして空しく墓中に葬らしめしや。

已にして斷頭臺に立たんとす、佛國一般の習慣として女子は男子に先つて死に就くを常とす、何とあれば將に死するの身を以て人の死に處せらるゝの苦痛を見るは自ら死するよりも十倍の苦痛を覺ゆるものあればあり、マナンは則ちラマーナに向つて曰く爾はよろしく我に先つべきありと、然るにラマーナは尙も躊躇し居たりければマナンは恰も人をして快樂に先だゝしむる如くに、笑を帯びて曰く願くは婦人が最後の請求を空くすると勿れ行けど、靜に彼の背を打ちければラマーナも之れに心を勵まされて潔よく其の身の最後を遂げたり、マナンは其終るを待ち悠然として立ち上がり櫓を踏んで臺上に進みしが、其の足あみ常に異ならずして毫も度を違へず、體がて臺上に立ちし時、炯眼遙に自由の紀念碑を目

して一拜し——嗚呼自由よ世間爾の名によつて此事を行ふ者あり——と言ひ終るや、直に首を差し延て、一斧の響と共に脈搏茲に絶へにける。マナンが死する時に於て恐怖の念を懷かざりしことは死後に於て之れを證せり、元來人は立ちあがら首をはねらるゝときに於て恐怖の念あれば、脈血を盡く、脈下に壓下し去るを以て首を刎ねしの後、直に血の出づると少きも、恐怖の念あければ、顔色も常の如く、血液の循環も變らざるを以て、血は直に迸出するものあり、されど通常處刑の場合に於ては十中の十、迄皆恐怖の念を懷かざるものあきを以て、刑場に於ては殆ど之を見るとあきも、マナンの死するや、二條の血線非常の勢を以て迸出し、以て其脈を蓋へりとぞ。

此事を聞くや、ローランドは自殺し終り、バザーは地方に流寓し居たりしが、叫んで曰く雲隠れにし、夜半の月哉、佛國の天地は眞の闇黒とあれり、我

身は茲に在るか我れは知らず否我れは已に烏有に歸せりと是より後バザーは恰も狂人の如く裸躰赤足飲を絶ち食を斷ち終に原野に斃死せしとせん。

斯くの如くにして佛國共和の基礎を打ち立てしの人はず内史上天を幕に地を臺に各技倆を逞ふしたる空前恐くは絶後の大活劇は局を結べり是れを以て一時世はロベスピエール等の世となりて百鬼の夜行も久からず彼のナポレオン一世の躍出するときとなり再び佛國の自由を蹂躪して帝權を立つるに至りしがナポレオンが歐洲全土を席卷し震天動地の大業を爲せしもマナンの一死に如かざるものありナポレオンが打ち立てたる帝業は三世數十年を出でずしてじびマナン等が打ち立てたる共和の基礎は假令中途にして塵埃の蔽ふ所となりしと雖ども其建築は能く歐洲の表面に屹立して今日の佛國を養成し人民は千歳永く偉

業を仰ぐあるべしマナンの一死は百年の後能く佛國社會の中に復活して三千餘萬の人民をして自由に向つて忠義の膂を堅ためしめたり生きて英雄豪傑は死するも英雄豪傑あり昨日佛國の精神は今日も佛國の精神ありマナンの墓は則ち是れ佛國自由の紀念碑あり佛國の社會は多端あり政事上の方針一歳數度の變更あり時に激浪怒濤の國境を打つありされど其の倒れんとして倒れず沈まんとして沈まざる所以のものは則ちマナン等の精神其中心となりて今日に活々たるものあるに由るに非らずやマナンの佛國に功ある又大ある哉

内務大臣西郷伯序 河井庫太郎君著

# 大日本府縣志

全部百廿八卷合卷凡四十册紙數凡一萬頁

○全部定價金二十圓 ○豫約價金十五圓

從第一卷 一册既成 定價金五十錢  
至第四卷 豫約價金三十錢

●本書出版ハ毎月二回或ハ三回トシ本年十二月ヲ以テ完成ノ期トス ●本書紙數ハ概算ナルヲ以テ全部完成ノ上ハ多少ノ増減ヲ生シ隨テ代價ノ増減アルモ計リ難シ ●豫約御申込ハ本年二月十五日限トス ●豫約前金ヲ要セス製本出來ノ報告ヲ得テ直ニ御送金アリタシ

●製本ハ本綴紙表紙トス惣シロース上等製ハ一册ニ付金拾錢増 ●荷造運賃ハ實費申受クハシ ●郵便爲替ハ東京郵便局又ハ芝口郵便局宛ニテ振込アリタシ若シ郵便切手代用ノ向ハ一割増トス ●見本御望ノ向ハ郵券二錢御送附アリタシ  
本書ハ地理學ヲ以テ有名ナル河井庫太郎先生ノ編輯ニシテ前古未曾有ノ一大地理書ナリ抑モ内務省地理局ニ於テ曩ニ大日本帝國誌編輯ノ舉アリ普ク各府縣ニ徵シ地理ニ關スル材料ヲ蒐集シ又局員ヲ各地方ニ派出シ以テ實地ヲ探究セシメ既ニ安房國誌ノ上梓アリシニ故アリテ其業ヲ休止セラレタリ先生曾テ職ヲ地理局ニ奉シ其編輯ニ從事シ公餘ヲ以テ浩澗ナル材料ヲ抄録拔萃シテ殘サス職ヲ罷ムルニ及ンテ專ラ力ヲ本書ノ編著ニ盡シ更ニ諸家珍藏ノ古圖誌ヲ參照シ千辛萬苦終ニ此大著述ヲ爲スニ至ル實ニ天下有益ノ良書ト謂フヘシ弊舖辛ニ先生ニ請テ之レヲ發兌スルノ榮ヲ得タリ伏シテ請フ大方ノ諸君此舉ヲ贊成シテ陸續豫約アラソコヲ

東京京橋區本材木町三丁目九番地

豫約申込所 出版兼 發行所 秩山書房 吉田千足

東京京橋區銀座四丁目

同 博聞社 長尾景彌